

昭和二十二年度

三月一日

去年十二月九日より昨日まで舎は閉鎖していた。昨日、閉鎖中の決算をなす。一日食費四円也。現在舎生、上野、北野、村上、中川、石川、飯田、草地、中津、今井、三角、世木澤、河瀬の十二名なり。

但し、今井は今朝歸省、食料欠配多く心細し

三月二日

本日、冷凍芋配給、これと北野君の努力で芋二俵、これで一寸、一息といふ所。天気よく、雪どけで道悪し。別に変った事はない。飯田君数日来風気味。

三月三日

今日はたのしいお節句、夕食は、赤飯、久しぶりに米の顔を拝む。今井氏歸舎、同君近頃暮に熱中、上達ぶり目ざまし。中津君一日より義足、全くうまく出来ている。あの調子なら、少し練習すれば、普通に歩けるようになれると思はれる。早く上手になって下さい。

河瀬、今度解剖学教室に入る。舎を留守にする時間が長くなると思ひますが、御了承を乞ふ。
以上 河瀬 記

三月四日

小杉さん歸舎さる。屋根の雪も殆ど落ち、道路も乾いた所が出来て、大分春らしくなつて来た。もう、子供は、道で野球をやり始めた。舎では、世木澤さんが試験を前にして猛勉強中。予科生は、猶閑日月ありといふ所。

三月五日

村上さんの提案と実行によって、現在までの娯楽室が勉強部屋に変わるらしい。早速、明日あたりは、娯楽室のボロ畳が、どこかの良いのと変わるだらう。物資不足の折から仕方のない事だ。夜、便所から学校の方向に火の手が見えた。中川君の話では、工学部の一部が焼けた由。さぞ困る事だらう。

ストーブを焚くのもあと暫くだが、寄宿舍でも注意しないと危険な事だ。 上野 記

三月六日

ちきう節。女学校は休みかしらん。私は、知人の宅に病人が出て、無断で二泊のやむなきになりました。おわびします。

三月七日

三角、中川両氏盛にスキー熱をあげている。

技は、如何程か？

“ 感激の町 ” を一応感激してみる。

三月八日

毎日 同じ事をくりかへす。

三月九日

草地、村上と教会に行く。田崎さんが見えて居られる。東京に歸られるそう。

話会。話は自信がついたそう。羨ましいと思ふ。ひるめしを食ったら、もう、夕食であった。

三月十日

食堂に集って皆んなで話す。

副舎長の件.....任期も来たが、まだ1 / 2の舎生しかいないので、選挙を見あわし河瀬兄にこゝ暫く続けて頂く。

新入舎生の入舎の件.....舎生の知人のみで一杯の筈

受験生宿泊の件.....泊る事とす。

勉強室、オルガンの件.....他人の意志に迄立入って考へる事が民主主義の根本

村上、の自由学園式、リーダーシップ制、新学期より採用、賛否.....結局 ず、
全ては、次回四月十五日の集会に持ちこす。

大掃除は六日、部屋がへは四月十日頃

終って“話の泉”をやって十時頃解散

正面入口開放決定する。

三月十二日

春期休暇、理学部は、三月二十四日 四月五日。後学生たちの進入に共なひ、三年目の学生は、六日頃には出て欲しい意向を持つ教室も有る。何が何だか分らない。

民主主義の下に白昼堂々と実にダキすべき程のゴツゴウ主義とセクショナリズムの暗躍が繰返される学園をみて、民主主義形態への一つの過程と見るのには、少し淋し過ぎる形相で有る。夜、猛烈吹雪く。

三月十三日

夜、疲れて早くねる。小母さん風邪で寝る。

舎はどんな事もなく平凡であった様だ

(北野)

三月十四日

天候落ち着かず、時々吹雪きになる。今日もスキーに行く。昼間、舎は閑散として、一人か二人しか居ない。

三月十五日

今日も又雪、時々霰となる。村上さん、舎の食糧の爲歸省さる。飯田さんの朝の体操三日坊主にならず続く模様 中川記

三月十六日(日)

草地君教会へ行く。後に宮部先生座られた由

三月十七日

リラの花忘れじのロケ始まる。飯田君見にゆく。年度会計始る。

三月十八日

受験生二人（世木沢君弟及長田君）泊る。理事会は中止

三月十九日 曇る

朝、上野君と話す。昼食共同炊事のことについて。上野君は、今迄通りに集めて、炊くことだけ一緒にしたらよいといふ。さうしなければ、1月三俵も多く集める必要があるといふ。一応尤もだと思ふけれども共同炊事にしたい。祖国を起す協同組合精神を寄宿舎から起したいと願ふ。そして、学生生活は、経済性の面の改革ばかりでなく、生活労働についても更正されねばならないと思ふ。

草地君、小母さん、直ちゃんが病気で寝ている。

村上

三月二十日 晴

昨夜、大分降雪あり、依て、村上、三角両君、午後より勇躍三角山へスキーに行く。

予科、入学試験始る。今日は智能検査とか。

石川

三月二十一日 曇、雪降り

予科入試、学科試験始まる。嬉しや、主食の三日分配給あり。本日は、春季皇霊祭なり

三月二十二日 雪積る

スキーに絶好なるも出かけるものなし。予科の試験。本日の身体検査を以て終る。

舎に変わった事なし 草地

三村さん、夜遅く歸られる。六日間もかかった由、草地、スキーをして、夜、窓をたたきあるく 草地

三月二十三日（日） 今日も一日雪積る

飯田氏歸省す。医専休みにつき。

舎に変わったことなし。 中津 記

三月二十四日

久しぶりに米二日分配給になる。欠配も久しい。政府いかに之をなすや。夜、三角君清水にゆく。食糧不足は、学生生活に多大の負担なり。榊原君、卒業式出席の爲来る。

三月二十五日

榊原君、卒業式に臨む。蛩雪の功なりて、学校を去る感いかに。夜、青木氏来舎、御令息農学部御入学の由にて襟章、角帽を御求めの由、雨になる。春雨の音な

小杉記

三月二十六日

三角君は買出しより無事歸還、大類君、故郷より歸舎す。

泉田記

三月二十七日

花曇りといへる処で陽さしたり

既に五条通りの片面は乾きて、通る自動車の後は、馬糞風を思いだするもの有り

今井記

三月二十八日 快晴

芽が吹けば完全に春だ。福重兄弟歸舎、街へ出る。何と人間の多い事よ。狭い国土、泌々と生活、圧迫を身近に受けた様感ずる。兎に角忙しさに、用あり気に歩く。能率悪い動き方だ。空廻りだ。この空廻りが物價をどん 上げる恐るべきエネルギーロス、都会を消費地と云ふのはもっともだ。そして札幌も兎に角都会の一つだ。 世木澤上野歸舎す。

三月二十九日 曇

本日、予科発表あり、見に行く。知った者多く落ちていて少しがっかり。メツチェンは三人パス。宮部さんも入っている。苫米地長官候補の応援に行く話たり。

三月三十日 曇

朝から少し寒い。豊平へ芋とりに行く。

北野、三村、石川さん三人出かける。泉田さんは歸ってきて、もう行かないさう。

三月三十一日 曇

明日から手紙あがる。三倍以上。此頃、又いろんな物、ずいぶん上りそう。はりきってないせいか、ねむくてしょうがない。予科の試験迄あと十日、そろ 始めるかと思ふ。

(以上三角記)

四月一日(火) 曇時々小雪

今日からいよ 四月である。が、春とは全くの名のみ、外は小雪交りの風が吹いてその冷たさは又かく別である。国民学校が再び小学校と昔懐かしい名にかへり、今日は楽しい入学日であった。夕刻、殺人犯白鳥氏脱ごくの回覧板が廻り、おぼさんの所へ草地さんが った。エイプリルフールもなにも事なくすんだ。

四月二日(水) 曇

今日も何だか寒い憂うつな天気であった。世木沢さん歸舎、午後十時から昭和二十一年度会計総決算が行はる。先月は欠配續であった為か、そう高くなかった。決算の後、副舎長より色々と舎の問題についてお話があり十一時散会

四月三日 暴風強し

草地さん歸省さる。三角君のおぼさんからピンポンの玉が郵送されて来たので、久し振りにピンポンの音が聞かれた。ニダースあるからしばらくは華やかだらう。夕刻、衣料五点配給あり、上野君、中津君、福重兄弟、今井君に当たった。

おぼさんは角田へ行かれて舎は静かであった。(?)

四月四日

約一週間前(三月二十八日頃)青木三哉(監事)より舎へいも半俵余り寄贈されました。

今日は大分暖い。誰がやってくれたのか、いつも雑然たりし食堂がきれいに片付いている。別に変わった事もなし。(河瀬)

四月五日 曇時々晴

晴れやらぬ雲より淡き光りもれる。哀春なり。外窓に見ゆる人も、今日の庁官、市長選

拳に歩しげし、着飾りし女子の行くのも見え、陰気な、いまだ日影にむごたらしく、シューテイの体なる雪もまぶしからむ。

夕とばり、春雨と共に降り立つそばの雨に濡れて球遊する。上野、三角兩人の戯音も、新春の喜びの第一声か、それも暫時にして静かな夜となりぬ。夜半の寒さにそば雨雪と化す。
(H弟)

四月六日(日) 快晴

小母さん角田より歸らる。やはり小母さんがいないと寄宿舍は汚れて食事も大変だ。明日からのダンゴも安心だ。寄宿舍の周囲も大分土が出た。そろ 畠物の準備をせねばなるまい。今年は大いに成績を挙げたいものだ。舎生全員の御協力を乞ふ。医学部、予科は、試験に直面したが案外にのん気だ。達人の胸中、閑日月有りか？石川さん歸省さる。
(上野)

四月七日(月) 晴

今日は、近頃になく良く晴れた春らしいのどかな日であった。舎の周囲の雪も窓のふちを除いて殆んど融けてしまった。こう雪が融けてくると、舎の周囲のきたなさが目について来る。我々は、やらなければならないのであるが、何をもなし能はざる今日此頃、それは何に原因するのであろうか？

試験が近づいたからだらうか。そうだとすれば、あまりに僕は自己中心主義である。が、原因はそれだけではなさそうだ。舎生活が落ち附かないということが、大きな原因ではなからうか。舎は一日も早く新しい歩みを始めなければならぬと思ふ。

北野さんは醤油をとり角田返行かれた。

我々の食生活は益々窮迫して来さうである。

だが、今日は寄宿舍で初練を食べた。やはり練はうまい。

四月八日(火) 晴

今日は、釋迦尊の生れ給ひし日であったが、生活に日々うみ疲れている日本人には、何の意義もなさそうであった。無関心なのだらうか？！

釋迦の教理は“煩惱を断滅して涅槃に達するを主とす”と云ふ。又、人生は、苦に始まりて苦に終ると。而して苦の原因は、情慾にあり、情慾の原因は、「我」の一念に執着するにあると。そして無我無念の境界に達するは、人生究意の樂地にして涅槃即ち是れなりと。

あゝ、偉大なる四聖釋迦！その教理をもととする佛教の現状やいかに？食足りなければ礼節を忘れてもよいのであろうか？

四月九日(水) 雨後曇

朝からしとしとの春雨であった。一雨ごとに長い冬の遺物の煤が洗ひ流され、きれいになって行く様な気がする。舎は何事もなく一日、又過ぎた。
(以上福重隆幸)

四月十日(木) 曇天寒し

明日から待ちに待った予科の試験が始まるので、予科生、皆大いに張切っている。

泣いても笑ってもあと二日の辛抱、大いにやるべし。英雄白鳥氏未だに沓として消息なし。無気味な夜が毎日続く。警察の無能、こゝにも暴露すか？早く夜平気で歩ける世の中に返したいものだ。（大類記）

四月十一日（金） 朝雪あり

起きてみると、一面の雪。約一寸程も積っていた。併し、午前中には道路上はすっかりあとかたもなくなつて了つた。今日より予科生、待望の試験。夜半に起き出で、ガヤと余念がなさ相だったが結果は如何

四月十二日（土） 晴

今日で医学部、予科とも試験終了で、一先づ全部がほつとした所、その上の快晴、舎内至極閑散も宣るかなである。

四月選挙もいよ 軌道に乗って来た感じ狸小路四丁目等目抜の場所は、スピーカーの嵐の如き感がする。

四月十三日（日） 晴

一度に桜が咲いて了い、さらな春日和、丁度うららかな六月の日ざしであった。足を円山へむけ、快適な春の日を十分に味ったが、思った程人出が少なかった。只、ランデレヴーの数が多く思われた丈。小生、此の春の日にも拘らず、うつ として楽しめない。風邪気味で陰うつな顔をしている許り

四月十四日 快晴

六月ごろの日のさしやうである。鼻の粘膜がカラカラにかはいて頭に血が昇る。学校が一せいにはじまって、宿舎はことりとせぬ。泉田、福重弟氏砥石岳にスキーにゆく。無事歸られるとよいが。

少し理屈をかく。憎まれ損のくたびれもうけにすぎない理屈を書きたいのもフロイド分析を行へば、抑圧せられた「春」の象徴かもしれない。とにかくよい天気である。

愛するわが青年寄宿舎の任務は何であるか、清き野心、大望をもつ青年を育てるにある。清き大望を濁世の浅ましきけがれに陥れざらんがためには、われらは、大勉強せねばならない。自由は、我らのモットーである。

しかし、独立のないところに自由はない。

實力のないところに独立はない。實力はいかにしてそだてるか。勉強あるのみではあるまいか。われらは、勉強せんがために全力をつくさねばならぬ。しかも、この全力は、一人でできるものではない。舎生の一致協力に待たなくてはならない。一致協力することによって、われらのもつ経済と時間を最大限に生き生きと活用しなくてはいけない。そして我々の経済生活の最大な要素は、食の問題であり、昼食がしかも最大の要素なのである。こゝろみに計算してみれば、食費は一月二百円くらいのものであるが、昼食は主食、副食あはせると三百円では一寸無理である。個人的な要素によっていろいろ状況の差はあろうが、しかし解決せねばどうにもならぬ問題である。どうにかなる式に放っておくよりも、計画的に舎生全体の協力で解決したいものである。

いろ　　な利害関係はあろうが、必ず食べずにはすまない問題であるが故に、又欠けてゆけば必ず身体に影響し、精神に影響し舎全体の空気に影響する問題であるが故に諸兄の美しき協力を期待する。二十人の舎で協同できないやうでは、救国の唯一の原理である協同組合も実行不能となり、遂に祖国は、清められ、救はれることがないのである。第二に問題としたいことは、時間の厳守と労働の問題である。早寝早起きを絶対に守らうといふよりも、それが舎の気風となってくればよい。朝食が十時迄も十二時迄も残ったり、いろ　　な会合の後につまらぬダラ　　の時間つぶしをしたりすることは、もうごめんだと思ふ。寄宿舎にはなすべき仕事がたくさんある。それを日曜日の朝にとりまとめて、三十分ばかりバタバタとやるよりも、諸兄の日課表の中に寄宿舎に対する神聖な労働時間を織りこんでほしいものである。

理くつばかりで、双の腕をたくましく働かせることを知らぬインテリは、青白いといふ外何とも形容しがたい。ごつごつした働く手を持たうではないか。労働してこそ、勉強にも力が入るのではあるまいか。

第三の問題は、私達が心を開いて語りあふといふところの問題であり、それは討論の形式で相互の理解と仕事に対する義務を規定しなくてはいけない。日曜の夕方一時間位を、サンディ・イブニング・パーティーとして持ちたいと思ふ。

第四の問題は、いろいろの会の用事、例へば物品管理とか清掃とか畑とか運動とか文化とか、いろいろの方面に、分業したグループをもちたいことである。そして全力をつくす何人かの人々がいたら、一年中かはりなく舎の仕事は、八カ八カとはかどることと思ふ。

第五の問題は、冬の始末を今のうちにつけておきたいといふことである。ストーブの修理、ロストルの購入、煙突の購入、冬の勉強室の整備、外煙とつのことなど、今のうちに手配しておくことが肝要であって、間にあはせばかりやると、火事を出したり永い冬の期間をうやむやにおくことにならう。

永い冬の休にとりとめもなくかきつけておいたことがこんな風になった。清新な気持ちをいつまでもたもち、いつまでも充実した勉強生活をすごすために、私達は、もっともっと協力しなくてはならぬ。われわれの力の中にひそんでいるところのものを出しきらなくてはならぬ。そして、他人のことにいらぬ気をつかったり批難したり責めたりすることなしに、自分のできるだけのことを明るくやっけてゆきたい。これが私の希望であり、又自己に対するはげましでもある。

村上 記

附記、寄宿舎の各室に外錠をかけ、又戸締りを厳重にすることはどうか。便所の戸がいつも開けばなしである。名誉あることとは思へないがどうか。

四月十五日 快晴風強し

今日は、皆揃って早起きであった。夕方六時より、リーダー制、部屋換等につき話す。副舎長には草地さんが当選。リーダー制は反対が絶体多数、然し、その精神は今迄の組織の中に織り込まれて、更に舎生活が向上して行く源になると思ふ。 中川記

四月十六日 快晴

昨日決められた部屋替へを実施する。今日から皆が新しい気分で生活出来ることだらう。今日は非常に暖かい日だった。昨日のラジオでは、昨日の平均気温が十六度で平年より十一度高いとか。田中・有馬の長官決戦投票が本日行はれた。予測を許さないものがある。市会議員に立候補する さんの選挙援助に、三村さんが中心に舎生がたのまれたが、今日はとう 行かなかったようだ。長い 冬眠からやっと目覚めて、春らしい日ざしに、今日から活動の一步をふみ出す意気感が感ぜられるやうだ。

何とぞ行手に過ちなきやう。

田中、有馬氏決選投票、田中氏優勢、田中さんが優勢といふ事実に関連して、色々考へる。 風呂の歸り途に手稲をみたらうれしくなった。春が来た。 北野

四月十八日

本日より予科休み、寄宿舍中誰もおらず、静かな時はてんで声なし。騒がしき時は蛮声数町四方を圧す。

四月十九日

誰の口からも聞かれるのは、春だ、春だの歓声、陽はうらら、植物園の芝生の緑も次第にこくなる。

四月二十日

予科、最後の休み、且つ日曜。曇り。夕方映画館より出で来れば雨となる。予科の成績発表になる。ドペリは、舎には皆無。先づ 目出たし。

四月二十一日(月) 終日雨

晩を覚えざる春眠を、アルバイト部長の勇しき叫び声に打破られて、勇躍床を蹴って飛び起きたり。常日頃、朝寝の権化と謳はれしK氏に「お早よう」と言はれしことは小生の深く愧ぶところなり。七時より先般決定された恒例の会食あり。

先づ副舎長より、新入生、ヒーター、理事会に就いてお話あり。次に平さんよりエッセンに就いて、特に新入舎生歓迎会の時に赤飯にすべきか、或はパンが可なるかの問題は、議論沸騰し、遂に民主主義の根本原則たる多数決に達し、パン党は僅か一点の差をもって辛勝せり。赤飯党溜息をつくのも又哀れなり。

次にアルバイト部長より鋸について、如何なる方法により金を捻出すべきや相談あり、結局、新入舎生の現物購入費を充つことに落着せり。又世木沢文化部長より、図書 of 整理につき御注意あり。

最後に昼食を作るときの燃料について討論あり。石炭の都合よきため、当分食堂のストーブをたくことに決せり。

本日より予科、理学部の新学期始る。幸に舎より現級維持せるもの出でず。地獄の門とも続くべき校門を嬉々として通る新入生多し。われらの成績を発表せる掲示板に群がる新丸あまたあり。我等の権威落つること甚し。

四月二十二日(火) 暴風雨後曇

目を覚ますと物凄い風だ。雨に混って曇も横なぐりにパラ　と硝子に吹きつける。朝食をとりながらKさんが、読書には快適な日だと言われる。学校へ行くのがとたんにいやになる。あちこちで「学校が休みにならないかなあ」との歓声多し。しかし、意を決して行く。森田君の令弟より来信あり、彼は病気だそうだ。早くよくなればよいと思ふ。

八号室　〇生

四月二十三日（水）　曇天

学校は始まり、自分も二年目　なつたが寄宿舎には新入生が来ない。来る時に来ないのもいいものではない。矢張り季節の端れなど、余り端れているのも不快なものかも知れない。

四月二十四日（木）　陰雨冷え

朝晴れると見せかけた空模様も一瞬か、東の方から服颯呑の風、大樹を動揺させ一振幅大いにゆすらげば、空の光は、厚き黒き雲に塞ざされぬ。忽然降る雨に身振りしながら筆をとるも　あるかな。

本日、始めて新入舎生を迎ふ。姓は吉田　In person の方からの a point of view は、過日の image 多分に在り。偽者には強敵！

熊本中学出身　吉田　司　君　入舎

予科農類一年

四月二十五日（金）　曇

春の気まぐれ天気は、愈々もって愛想が尽きた。寒風に打たれて学校に行く。　照る日の光に、皆暖さを求めて集いよる窓辺は、此の様な日の楽土と見ゆ。暗闇にとは言へ、さほどではないが、常より小暗に夕飯の湯気、人待ち顔に立つが見え、嬉しく食ふ。

四月二十六日（土）　晴

東の木の間から、此の二、三日見ること出来ざりし the mighty orb の赤い顔ゆら　と昇る。碧空に見る白雲、げに春の景趣あり。照る陽の光に雲際鮮色ピンクに天中舞ふ蛇の如し。大樹の影、緑地しかならず。萌ゆ緑の地、植物の遊園も数條の光に、をちこちと映え、又春趣あり。雨上りの黒土を踏んで庠校に歩を取る。真向にさす光まぶし。溜水 reflection する天の容また美なり。しかして溜水に　哀あり。

今日二人目の新入舎生を迎ふ。深川中学四修の半田君、兄の部屋に入室したとの事とて welcome party に呼ばる。

四月二十七日　驟雨

漸く春らしくなり僕のやうなもの迄が朝起をするやうになった。間もなく郭公鳥も来て緑香る札幌も近いであらう。

April 28th Monday.　Fair　orning cloudy afternoon.

Kyo wa asa kaishiokuoshi iro　　na

Sonomaeni Arbeit ga ari hatarke ya bording

gai no soji o shita. Kaigi dewa rijikai, pinpon

no limit, heater no number nado ga eimeirareta. End

四月二十八日（月）曇

春が来る前触れか、毎日この一週間あまりうっ陶しい日が続いている。人の気もふさぎ込んで 憂うつだ。

四月二十九日 天長節 雨、強風

人間天皇の御誕生日、変れば変った淋しさだ。外はゴー たる嵐だ。今日の様な日は、寝るに限ると、午後から早速就寝、寝ながら風の音を聞いて居ると、何か懐しい物でも聞く様で、中々良いものだ。大鋸が有った由、大分助かった。 上野

四月三十日 曇

今朝は又何と云ふ静けさだろう。あの嵐を連想して、汽車が突然近付いて又遠ざかる時に感じる一種の虚無に等しいものを感じ何んとなく淋しい。然しこの二、三日、必要以上に睡眠をとって、元気はパリ だ。

五月一日 雨後晴 風強し

待っていたメーデーに、今日の天候は困ったろう。舎は新入舎生歓迎会で忙がしい。宮部先生、高松先生、奥田舎長其の他先輩諸先生御出席になる。新旧副舎長の挨拶、祝辞等あり盛会であった。終って鈍才会あり、明日授業の爲早く終る。 中川

歓迎会次第

- 一、開会の辞
- 二、新旧副舎長挨拶
- 三、新入舎生紹介
- 四、会食
- 五、舎生祝辞 村上さん、福重さん
- 六、先輩祝辞 高松先生、若松さん
- 七、舎長祝辞
- 八、宮部先生の御話
- 九、閉会

宮部先生御話要旨

先生八十余年の御体験より、予科入学又寄宿入学の事が一生に及ぼす影響の大なるを諭され、又己の仕事に専心して居れば、運命は自ら開かれる。夢に走らず現実に虜れず職分を完遂して行くべきを教えらる。

五月二日

連日の悪天候、次第に回復す。桜星会の大会あり。自由会の案否決、昨年以来の 案去って予科に春が来たらしい。

本日第 11 号室に新入舎生予科理類一年坂井一君（北見中学出身）入る。 中川

五月三日

久し振りで春らしい良い天気。本日から新憲法施行。ドイツのワイマール憲法の様にな

らないで人間の生活の出来る日本となる礎となることを願ふ。

坂井

五月四日

天気の良い日曜日、美しい春の芝草、植物園の中を自転車で走る。進駐軍兵士、テニスコートに遊ぶ少女たち、ピンポンのたえざる音。寄宿舎の畑の開墾もそろそろ 終わったらしい。夕日が赤く沈む手稲。

北野、福重（兄）、吉田、中田、坂井、三角の諸兄、宮部先生の畑の耕しにゆく。

リチャード博士夫人より米国から送られた美味しいエッセンをいただいた由。寄宿舎を愛する心いよ 不快。ノドをいためて一日舎にこもる。

村上

五月五日（月）快晴

上野君の号令一下、六時十五分起床、各自各自割あてられた仕事をしたる後会食をなす。会食のときにもっと活潑な意見の交換があってもよいのではないかと思ふ。毎月曜のみこんなことをしなければならぬ理由に対する究明の余地は、はたしてないのだろうか？

本日河村君入舎、瀧川中学四修川村寛廣君予科工類一年。夕食後、在舎する者のみの間に自己紹介を換す。夕食はすばらしき“すし”であった。今井、福重弟両君歸舎、盗難に会い消耗していた。

草地

五月六日（火）曇

日中になるに従い雲が厚くなり、夕方あたりから一雨ふるかと思っていたが、次第にはれて来たので、一応ほっとした気もちだった。夕方、久しぶりに薪切りなどをして少し身体を動かしたが、仲々気持がよかった。じつとうづくまっただけでは、気分も不快になる様に思ふ。

昨夕、舎の昨年度の一日食費のグラフを作ってみたが、一年の間に丁度二倍位の上りを示していた。一昨年に比較してみると、もっとすごいだらうと思った。

夕方、予科生が寮歌練習をしていたが、丁度今日正午頃、予科の横を通ったら、神さんが市立高女へ行くとかで送別式をし、“都ぞ弥生”をうたっていたが、全く何時も乍ら感慨深いものがあつた。

舎も現在二十六名の本当の満員になったが、未だ本当に明るく、充実して感ぜとれないのはどうした だらう。もっと そうしたことに真剣になって考へるのが足りない様な気がする。併し、段々と地味ではあるが、そうした息吹きの感ぜられるのは心強い限りだと思ふ。

今日、米三日分配給、約百五十円程とか、人数も多くなつたと今更乍ら感じた。配給の前途は、暗い様に思へる。現在、米びつは一杯ではあるが、両方とも一杯 これが何時までと考へると暗くならざるを得ない。生活の根本たる食生活に余裕がなくなつては、あらゆる事が暗くなつて了い、はばまれて了ふのである。畠の方など本年は相当程度の削減をなしたが、たとい反別が少なくともそこより少しでも多くのよいものを得る様の努力が肝要と思ふ。去年の様では、今年の多数では、全く焼石に水どころではなから

う。それに燃料の面でも相当程度の不足が計畫される。種々の方面よりの打開策を打樹てねばなるまいと思ふ。冬季使用のストーブ、煙筒にしても、心掛け一つで大きな問題となつて来ると思ふ。

色々の舎生活の面で、気づかれた点、或は何かよいことを聞き込んだことがあつたら知らせて下さい。諸氏の積極的なご援助を期す。 平 記す

五月七日（水） 晴

朝から快適に晴、昼間は暖くて先生の話が眠り薬みたいだ。ノートが何時の間にかきれている。前庭のローンは出来上りがどんなものかはわからないが、一寸楽しみにもなる。部の資材一段と増強され支柱の設定を待つのみ、まあ、排球がいちばん簡単に出来るだらう。季節も又快適の時、大いに楽しく身心の強正を努めるべし。今年は東西対抗で種々の試合を行いたく考へている。

（三角）

五月八日

変わった事もない。桜が咲きそめた。

五月九日（金）

天気よし。近頃、学校ではダンスが次第に盛になって来つゝある。医学部では、ダンサー数名来て講習、小生も好奇心から顔を出して見た。どうも自分にはこの様な種類の所へ顔を出すのは、本質的に悪であるやうな先入 があつてこまる。考へて見れば、之が本質的悪でないことは確かだらう。然し、自分が之を習い行ふ事が望ましい事か否かは又別問題、さてどうしたものか.....

河瀬 記

五月十日（土） 晴

寄宿舍の猫（ブー子）先日六匹を生む。純白より純黒迄種々ありき。種芋五貫目配給。朝食キビダンゴ売行き悪し。夕食ライスカレー快適。医学部新入生歓迎会、劇、盛大なりしとかや。夕六時より中央講堂で文協のレコードコンサート聴く者、三村、飯田、石川..... 記

五月十一日（日） 晴

聖書読む人多くなりて、今朝は九名程教会へ行く。明るいそして和やかな近頃である。円山の桜花は、八分目程開き、植物園の芝生は一入緑をました。舎生では数名程昼食持参で出張せる者あり。円山は近頃になき盛事と聞く。 中津 記

五月十二日（月） 晴

朝六時より舎生全員起床、アルバイトを行ふ。舎の周囲の清掃も行き届き、予定の畑の作業も進んだ。例会には舎の前の芝生の設計の投票行はれ、第二号室案（石川・中津）が決定される。又ヒーターの件、昼三個、夜二個に決まる。又廊下に置いてある靴は、明朝までに各自部屋に入れること。オルガン・レコードは、時間に制限なくして聞いてよいことになった。

愈々春もたけなわとなり路行く人の群れて、参々伍々に男蝶、女蝶にはあらねども爛漫なる桜花にそふる風情は、又ふさはしきものなり。 中津 記

五月十三日

遅配、欠配で巷は正に地獄の図、それを外に、昨日、今日の円山の盛観は、筆舌に尽し難し。

絢爛たる桜の下で青春を欧歌しつつ踊り狂う青年の群も其の数少なしとせず。しかし世は正に春なり。猫が鼠を獲る事を忘れるとかや、かくなる青年が出て春らしい気分が世に拡がるのだらう。又それを以って春と云ふのだらう。

青年が春を創造する。 それはチト変だね。

明智 記

五月十四日

昨日の雲行きにもかゝらず、今朝は早朝からの晴天、薄モヤのかかった朝の空気が美しい。木々の緑もやっと淡黄色にもえ出した。

馬鈴薯二日分配給、ホコリ風吹きすさぶ。別に変りなし。 世木澤

五月十五日（木） 晴、風多少あり

毎朝実に気持のよいお天気が続く。皆んな早起きになって、各人、色々のアルバイトをやられて居る。やはり春だなあ！と、どうしても叫ばざるを得ない。

本日、舎の図書整理を行ふ。十三冊行方不明。又、本が毎回きたなくなり、壊れて行くのは、大変惜しい事だと思ふ。図書の新調が困難な今日、舎生全体が大いに心すべき事だと思ふ。

夕刻、予科生、新丸間で、ドイツ語の合同勉強が行はれている。長く続かん事を熱望す。

又、今日は、三吉神社の例祭日で夜暗く迄境内で行はれているのであらうコンクール大会か何か、にぎやかな歌い声が聞えて来る。

今年の各部のスケジュールは、未だ発表になって居らぬ様であるが、次の月曜の朝頃に発表されん事を望む。

五月十六日（金） 晴時々曇

降るかに見えて降らず、折角播きつけた種も容易に出揃はない。ここで少し降ってくれたらほこりも立たないであらうに。

午後、木炭配給六貫、八時半より福重の紹介になる松田こと無下宿困惑生の一時假入舎討議後、期間最大一ヶ月として假入舎許さる。中田歸省す。

五月十七日（土） 曇

ムツとする様な新緑の香りが、寄宿舍の周圍に充満して、もう“リーベルマイ”も半ば過ぎた。朝、気持が良いので自然早起となる。午後、松田君、5号室に入った。夕刻、亀井先生来舎、宮部先生の「お宅の畠の手傳を、舎生の方々に今後とも続けてやって頂き度い」とわざ 依頼に来られた。

5号室

五月十八日（日） 雨後曇

昨夜来の雨止まず。朝、雨にけふる新緑をみる。十時頃、村上君歸舎。昼少し前より雨あがるも雲低くして、ふり来らんとして未だ来らずといふ様なり。

五月十九日 曇時々雨

小生、偶然森田君と 三階にて遇ふ。市立病院に入院し、先日退院せりと。電気衝撃療法を行へりとか。幾春別の自宅は幸ひに火災 をまぬがれ得たりと。

本日、朝は降雨のためアルバイトは後日におあづけ。次回より毎週土曜日にアルバイト並に会食を行ふに一致せり（N・I）

五月二十日

終日小雨模様で少々寒々しい日。それでも緑は目に しい。もうそろ 晴れて欲しいが。雨が上れば、たちまちに緑一色、そして夏、そして夏休み、そして秋は卒業。

實に、自分の冬眠を続ける様な日々にはおかまひなしの月日の経過ではある。

北野

五月二十一日 曇

緑、今更ながらすがすがしい。札幌の春を思ふ。今朝、七時半より八時迄、畠のアルバイト。間引きを行ふ。

五月二十二日（木） 曇後晴

相変わらずうとうしい天気だ。しかし、さすが春だ。窓を通して見える山々がめっきり青くなった。郭公も鳴く。ライラックも咲いた。夜更けに予科生大分騒ぐ「泥棒」「々々」との喚声あり。戸締りご用心。

May 25th Friday

Weeks of unseasonable depressing coldness is clearing up from yesterday, block of lowering spring cloud's shadow is reflected on wet pavement, and we can see among the chasm of the cloud, the serenity of blue sky for ever and for ever unvarying, but in varia this small weatherfore cast lost its worth when the dawn came. For even now, at the time of 4 p.m.

the wind roaring among the tree tops.

In George Gissing I saw one time the next sentence, "of course one ought to be able to breast weather such as this of today, and to find one's pleasure in the strife with it. For the man sound in body and serene of mind there is no such thing as bad weather, every sky has its beauty, and storms which whip the blood do but make it more vigorously. Remember the time" It pleased me well, and even now. I think it is one of the finest spirit. If youths. Now, the green veils of Hokkaido is getting more and more of denseness and beautifulness, and at the time of best we shall have little trip up to the mountain. The green leaves, the clearest blocks, the wind blowing forests, and the weed en cumbered hills; to think of them is to enjoy the sense of

admission to the heaven. But I see there are some person who would prefer the recess of hot spring to walk about the spring earth. For my own part, I should like to say that, "Walk young man, to drink the earth to the lees." Because, I can find among such actions the heat of young men's blood, the noble vigour of earth, and the highest ambition for the life. (Having nothing prepared, I fouled precious diary with my unskillful litters and sentence, here I beseech your genuity.) .T.

五月二十四日（土）

Dir Vergangen zu erlosen und alles "Es war" um z nachatten in ein "Lo wollte ich es" das riebe wir erst Erlismig.

「斯くあらまほしき」ものである。私も今さうである。+（陽）ion の多い日である事よ！鳥の声は、朝から耳に入って入らない。絶え間ない陰気な此の頃、雲の絶え間より青きものを見て喜ぶ人、喜ぶものを見て楽しむ者、総てが喜と楽とで充されている。青き天と緑の下界と、赤・紫と白と華麗なる色が浮遊し漂流する緑の囿の中、人が箱庭、此の自動の庭も今迄忘れられたかして、毎日の様に露出、雨に濡れ、泣き濡れ、濡れに濡れ、風に吹かれ、もめに ぬれた箱庭にも今日は暖かな日がさしている。

舎生も今迄の陰心と下界の+陽 ion と、いや誠に異極相引の理もて舎内しづかなり。さて、其の磁場に限あるなればその果をと思ひめぐらすうちに、一人二人歸り来ぬ。

一人目「ああ面白かった」と二人目「あゝ綺麗だった」と相互に感に入って居るものの如きも、第三者には、其の意解せず。

常ならぬ香の立つ夕飯（小母さん角田に行かる）に今日の快日にはづむ話笑とめぐる音磐とに手稲の山峰暗きに消え、又静寂莫たり

May 25th Sunday. Clear and mild.

I am not very fond of walking, but I have long found pleasure in admiring, so plodding along the natural conditions Above all, the rare flowers and the mysterious shapes of trees please me ex cessively. I love to come upon a plant, which is unknown to me, to identify it with help of my book, to greet iti by name when next it shines beside my path. Nature, the great Artist, makes her common flowers in the common view, no one in human languages can express the marvel and the loveliness even of what we call the vulgarest weed, the rare flower is shaped apart, in places secret in the Artist's subtler mood; to find it is to enjoy the sence of admission to a holyer procict. From what I think, it is the same truth found in human life. We see many persons, discussions, fictions, religions and philosophies every day, but think of them, how it separates from our minds and hearts. I think I can say also thus, "The

profoundest recess of mind is shaped apart, in places secret on the hands of one, who demands a truth from inexhaustible Nature. ”

Today, I have walked far, and at the end of my walk, I found a grass encumbered field, it opened on one side of valley secretly, descending for not many steps, I delighted myself with crystal like waters brooding. Hard by, stood a bush of maple trees, its lined bark as if with the character of some unknown tongue made the young maples yet more beautiful.

五月二十六日（月） 快晴

一週間に一度の三十分位の舎生全員のアルバイトは、畑その他に非常な効果を見せて居る。器具の不足な点から考へると、一見非常に不能率的な様だが、之を補って余りあるだけの利がある。作物もソロ　吾々の食卓に顔を出し始めた。今後は益々アルバイトの報いがあるだらう。種代其の他にも決して僅かの額でなく、アルバイトも大変だが、畑の恩恵は、想像以上に大きいものである。

今日、疊を上げて見たら、下に一糶位埃が積って居た。大掃除は面倒だが、たまにはやるもんだと思った。　　Y・U生

May 27. very fine.

Weather being very fine, got up later at seven, took my breakfast in a hurry, such an act being continued in these days, (perhaps you alike) .

So I must, before going to bed, consider myself and offer to you the following.

Every one of us have done such an act.

We have done it not once, but perhaps a hundred times. Now, how many of us, in spite of that experience, can draw a correct criticism from it? Well, we are apt to overlook the physical basis of habit. Every repetition that act, and we discover a tendency to perpetual repetition in our wonderful mechanism, whose facility increase in exact proportion to the repetition. In short, let us think over every matter, bad or good!

T.Y

五月二十八日 晴

坂井君、先月来の体の不調快復、午後七時半より集合あり。庭球ラケット、ヒーター、月次会、炭購入等の協議あり。

先週より問題だった遠足は、取止と決る。

村上さん、世木澤さんより寮史編集、牧笛につき報告あり。猶、畠を踏み荒す子供等には強権発動する事。宮部先生米寿御祝の委員は、北野、平さんに決す。

五月二十九日 晴

食糧八日分配給、とうもろこし粉。

昨日より庭球熱大いに揚る。一日も早くコートが出来れば良いと思ふ。大掃除完了。寄宿舎全体が綺麗になって気持ちがよい。

坂井

五月三十日 快晴の曇

むっとする程暑い。夏も近いので無理もないが、つい最近まで重いほど着物を着ていた自分等には、大分こたへたらしい。やゝ気分がゆるみはじめて来た。蚊も一度に出て来た。足も手も蚊に刺されてみな困って居る。これからずっと此の様な気候が続くと思ふと喜しくもあり、がっかりもする

(K ・ K)

五月三十一日

今日も又よい天気。朝六時半ごろから上野部長「ネポーした」と言ひながらおきてきて、一週間のアルバイトにとりかゝる。

畑も寄宿舍の周囲も涙が出るほどに美化される。

会食では、花島先生に「雪」のお話しをして頂くこと。六月の二十一日ごろ、文芸部で、来週の土曜から「自己」についていふ議論大会、短歌会、レコードコンサートを相ついで開くことが報告される。文流文庫のカードをとり福重(兄)君は忙しい。私は、現在の寄宿舍を心の極みに愛する。

いつまでもかやうに張切っている寄宿舍であるやうに。

村上

六月一日(日)

実によい天気であった。もう六月である。

半年は過ぎ去らんとしている。何となくあせりぎみな此頃である。難しいことは抜きにしたよい意味でのローマン主義に舎生活を送りたいと思ふのが此頃の実感である。

細かいことにはこせ としたくないものである。

夕、北野、草地、亀井先生を訪ひ、宮部先生米寿祝につき相談す。夜、川村歸舎

草地

六月二日 曇 平 記

此の数日来、華氏七十度前後の気温で、殆んど真夏に近い気温である。それに暑さで蚊が出て来て、そいつが又全くたちのよくない奴で、刺すと仲々ひどくはれる。頗る不愉快である。小生、近頃神経衰弱の傾がある様だ。余りに色々の雑務、雑用に気を配るからかも知れぬが、頭がこんがらかって、どうも明快なり得ない。忘れて了ひ度い様なことが色々ある。忘れる練習でも始めなければ、神経の過労におち入り相である。舎生活も、四月の意気込みが段々とうすれて行く様に感ぜられる。大類歸省す。

六月三日(火)

七日に高商戦迫り寮歌練習をする。ピンポン部でも昨日から台を借りて来て最後の練習である。午後雨が降り出し止むが、晩になって又降り出した。地図を見ていたら山へ行きたくなって来た。今日は少し冷々とする。気温十三度半、ねむい。此頃毎日だ。歸つて来てはぼっとしている。 三角

六月四日(水) 曇

昨日、今日は、天気も悪く、少々寒い。

朝七時、会食、宮部先生米寿祝の行事について舎生の意見を求められたが、特別意見も出ず。

河瀬

六月五日（木） 晴

天気は良くなったが、少々寒い。協同組合木炭配給日五俵来る。委員の平、世木澤氏真黒になって帰って来る。全く御苦労である。前庭に山羊を繋ぐ者あり。乳の一部位頂戴しても可なりと考へる。“如何”

夕方、飯田氏と卒業退社記念用レコード（悲愴交響曲）を買って来る。¥357.80 石川

六月六日（金） 晴天

別段変わった事なし。夕方、望月さん来舎、内地から来られて今晚はお泊りになる様である。来る七月十三日の宮部先生米寿の祝の記念会の贈物の事で、舎の先輩から寄附を集める爲の手紙の封筒を百十三枚 表て書きを書く。

村上さんと平氏の弟（昨晚泊った）と二人旭川へ歸る。又上野氏も歸る。

中津 記

六月七日（土） 晴

高商戦がありました。野球と排球は敗れたが、残りの六種目に於ては大勝を得た。村上氏旭川より歸舎する。黄金井さんの所へ米寿の記念祭（宮部先生）の事についてのお話しに草地、北野さんが行かれた由。

六月八日（日） 曇

ぴゅっーと云ふか底冷えのする風、舞ひ上る砂ぼこりに一日が暮れた。リュクサック組は、うらめし気に空を望める。午前中はピンポンの音、午後は静か。夕食後はコンパのざわめき。日曜日らしい音の経過。

北野、草地、平三氏歸舎。大いに空腹した由、御苦労様。

演劇研究会の公演があった。午後、二、三出掛けた様だ。感激したとの事。

世木澤 記

六月九日（月） 晴後曇

昨日のいやな風はぴたりと止んで、朝方は、さわやかな、実に美しいよいお天気であった。午後は、うす黒い雲が増して今にも降り出すかとも思はれたが、遂に降りはしなかった。

馬鈴薯二日分配給あり。夕刻、舎の先輩三宅さんが来られた。まあ 天下大平、一日大した事もなかった。（T・H生）

六月十日（火） 快晴

朝から良い天気。空には置き忘れられた真綿の様な雲が認められるのみである。午后少しく風あり、木のざわめきを聞く。別に大した事もない一日であった。

後記、九時頃、南方に震源地あり。三村さんの舎を気使ふ声頻りなるも、地震尚も止まず。なるべく地震は戸外で。

蛙の声、夜の雑音に混り夏を知らず。

N生

六月十一日（水） 快晴なれど風強し

終日風強く、街歩く人の顔快適ならず。平凡なる一日静かに暮れ行く。

註、昨夜 12 時頃、又しても変な地震あり。勉強せる者、就床せるもの卒倒す。もう少し皆の事を考えて行動せんことを乞ふ。

六月十二日（木）

六月十四日（土）

晴天、昨夜の曇天もすっかり夏らしく晴れ日中は、微暑を覚ゆ。明日は札幌神社の祭なので、町々に花の飾がキレイである。

本日は都合により、朝のアルバイト無し。

六月十五日（日） 晴後曇

午前中は見事なる晴天。好天に恵まれたる祭典であるので町は人出おびただしく、晴着の少女の姿が目につく。各区自慢の山車が町中をねりあるく。芸者を乗せているのもあった。神社の御輿も出て来た。御輿三基その他で相当の人出だった。

午後は曇って泣き出しさうである。五時頃神社参拝にゆく。人影僅かに五、六人、静寂の気みなぎっていた。人は一体何處に行ったのだらうと疑はれる。僕の故郷の祭典は、あくまで神社と一緒にいる。然るに此處では？少し不思議な気がした。泣き出しそうにして夕は来る。（K・K）

六月十六日

大学も午後から休み、曰く、自由参拝。休業には、理由は何でもつけられるもの。月曜日といふのに気がぬける。舎では今夜も御馳走がある。祭らしい気持ちにすっかり遠い様な気持ちで過した。明晩は、レコードコンサートがある筈。（北野）

六月十七日 晴

一年中デ今ガ一番ヨイ時ナノニ、風ガ強過ギルノハ残念。デモ、六月ハスバラシイ。ナマジ実験ヲセズ早く歸ルト、ジットシテイラレナイデ何かソワソワシテ困ル。

レコードコンサートハオ流レラシイ

六月十八日 快晴 風強し

予科の学期試験について発表あり、七月三日から三日間、メめて七科目だ。試験の早いのは消耗だが、夏休みが間近だと思ふと心が躍る。

舎の庭球熱、相変わらず盛んである。昼から夕方くらくなるまでやっている熱心な御仁もいる。が、コートが不備で甚だ不便、同好会の如きものを作って、根本的に作り直すことが必要ではあるまいか。 T・O

六月十九日（木） 晴後雨

飯米の配給あり。草地さん歸られる。

二、三日前から日中相当暑さが増して来たやうに感ずるが、朝夕の極端に冷えるのは全く心配させられる。日暮れにポツ　　永いこと降らなかった雨がやって来た。毎日ほこりの風に吹きまわれ続け、つく　　気持ちがよくなる。このよい雨に、作物がぐん延びるだらう。

June 20th Friday. Scudding and scenting breeze.

Nothing had to be written especially.

Tomorrow we. Joka boys, have the 40th celebration of Keiteki Bording.

May God give fine weather !

June 21st Saturday. Depressing cloudy weather.

Happily there was no rain in broad daylight. And the more pleasant, we have small rain at the midnight. Very cool rain, gives man a fresh spirit. It is said that the Celebration Party was a masterful triance.

June 22nd Cloudy and accasional rain.

By vigourous energetic persons, Fukuju, Sakai, Orui and Some, our bording's field was refined. Allday they worked hardly. It seemed so happily that let me think they are happy who can devote to their taste. My Sekizawa, Taira, Kusachi, Ueno returned to their homes, tomorrow former two and today latter two.

六月二十二日（月）

初夏の第一、光影は遠い所にある。

ペエイルパーブルの手稲の山峯とそのけじめつけかねるコバルトブリュの空、引延ばすを限りとした雲、唯々として、風の無いスペエイスに浮く。今日も暑くしてやるそと、下界を我が物顔に見ている。これは、起床寸時の西窓に入る夏の第一景である。

さて、洗顔でもと室を出る。そこは陰気な昔然たる寺院の階廊とでも言はうか、当に出さうな物が出ない奇怪な姿は、人の気なき夜っふかきに心神そゝる。

ことさらなり。東側の高欄間よりもる光は、シュウティ、ウォルに映えて、その趣情いぶかし。これこそ真夏、暑さ知らずの所か、其の季の人の誠に求めて得られざるの場所なり。これ初夏の第二景にして、真夏の遅歩をなげく姿なり。さて、身磨き心磨きて屋外に出ず。東隅に立つ大樹より。アウロウラーの女神の掌、我が足もと迄差出で、小鳥の奏する啼楽に又第三の姿あり。

啼楽の遠ざかると共に、ほら変だ　　と、人の覚醒をもとめて、足ばやの颯颯の風、エルムの小枝、葉をゆらぎて去る。この頃より「近きもの」初夏の第二の光影は近きものにありとよびたくなる。

舎人も夏待の風に、ふと眼が覚めてか、底ぬけの寺に、どん　　と足音のみ響く。

六月二十三日（月）　快晴

テニスコートは、完成するのは来年と思って居たが、四、五名の有志の奮斗により忽ち九分通り完成した。胸のすく様なアルバイトぶりだ。スポーツの興味は、あのアルバイ

トの苦勞を蔽ふだけの百白さが有るのだ。自分達は、もう毎日畠の作物を食べて居る。しかし、積極的に畠をやる熱意は零だ。ローンは、今年はとても駄目だとあきらめて居たが、やる熱意さえあれば忽ち出来ることを確信した。

予科の試験が済んだら早速始め様、今年中に開墾、地均だけは必ず終らう。各人、一人一時間びっちり働いたら終るだらう。テニスコートが二十四人時位だったと思ふ。

今年、其処に大根を作らうかとも考えて居まる。 上野 記

六月二十四日（火） 雨

久し振りの雨で、ほこりっぽい道路もすっかり清められた。雨に打たれ乍ら歸舎したが、又、何とも言へない気持だ。昔のことを思い出して懐かしい雨天を絶好の演習日よりとして頑張ったものだ。

六月二十五日（水） 晴

今日も降るかと思つたら快調に晴れた。雨に洗はれた木々の緑が美しい。

坂井は未だ直りさうもない。河村はもう良くなつたらしい。試験前だ。諸兄の健康を祈る。 中川

六月二十六日（木） 曇

夕べより今日にかけて、舎の猫が鼠を八匹も捕った。

午後、舎長の奥田先生が来られ、七月十三日に行はれる宮部先生米寿祝賀会について相談された。祝賀会の準備の爲、舎生は、次の様に任務を定められた。

宮部先生米寿祝賀会担当

祝典準備委員（草地、平、北野）

司会 北野

接待 三村、坂井、河村

会場準備 村上、中川

デコレーション（玄関、会場）石川、福重（弟）

内外清掃 上野、吉田

饗応 世木澤、飯田、上野、石川

食事係 河瀬、泉田、三角、今井、大類、中田、森田

筆記係 村上、福重（兄）、中津

余興 世木澤、福重（兄）

以上

六月二十七日（金） 小雨

近頃どうもスランプ。追試験を間近に控へて、勉強は少しも進まない。榊原君から手紙くる。父君、重態とのこと。米寿祝典には参列できぬ由。

美はしき 瞳の君と思ひしは アカシヤ ほほう 夕なりけり

梅雨あがり コスモスの苗 ひとつひとつ 移殖し終へて 土の黒さよ

楡の下 新装なりて夕には テニスコートの 音なりやまず （村上）

六月二十八日（土） 晴 （平）

定例の朝のアルバイトあり。畑のものはすっかり青くなり、毎食膳をにぎはせる。汗の結晶のたまものだと思う。

舎の周囲は、大分清掃されたが、まだ 仲々のことと思ふ。

楡鐘会の第四回の公演を聴いて来たが、矢張り、そこらのものとは大分かけはなれたものと思ふ。併し、予想が大きかった丈にそれ程のものとも思はなかった。

舎生の総員が二十六名にもなるんだから - 舎はじまって以来の多数 - 、舎生の生活状況とか、移動の状況とかを、一人一人届を出してやって貰ふ様にたのんでいるのだが、仲々守られない。身体状況も一応調査してみるつもり。

宮部先生のお祝ひも近づいて来たが、差上げる記念品の寄付の少いのは、全く消耗の極み、計画は大きいのであるが、問屋では仲々容易にはをろしてくれ相もない。

予科を始め、工学部、医学部などの小さな試験が、休みを二週間後に亘へてある様子。今日より少し暖くなった様子。

村上、今夕歸舎、彼には毎度御苦労様なこと。衣料配給あり。

六月二十九日（日）

よい天気であった。小生は教会へ、それから研究所へゆく。日曜の学園は実によいものだ。急に絵が書いてみたくなり、スケッチして歸舎。

予科生諸君は、そろ 試験で忙しそうである。どうか量的なものに目をくらまされて質的なものを忘れない様に。

小生は夕方のテニスに疲れて早く床につく

草地

六月三十日（月）

試験も今週といふのに、なんだか調子があがらない。テニスをやる。やはり運動すると快適だがねむくなる。

テニスコートは使用しても手入れがされないので相当ひどい。今のうちにもう一度平にけずりなほしてローラーをかける必要あると思ひ、いよ 一番暑い時期だ。試験が終わってからの計画を考へる。 三角

七月一日（火） 晴

七月!!七月といふのにまだあまり暑くない。去年の今日は、平、泉田、飯田君等と共に銭箱へ水泳に行ったのであったが、今年はまだ一寸泳がれそうにもない。然し植物園の蛙の声は、初夏らしい気持を誘ってくれる。夜、窓をあけ放して置いても蚊が入って来ないのは、D・D・Tのおかげか？

予科の人々、試験に忙しい。 河瀬

七月二日（水） 晴

珍らしく二ヶ月振り洗濯をやる。雨が降らなかったのは不思議であった。予科生は、試験を愈々明日に迎へて大奮闘である。

夕方、奥田先生寄らる。 石川

七月三日（木）晴天後曇り

本日は、予科生諸君の試験が始まった。後二日程あるらしい。

夜、六時半より一条教会で、植村環女史の歸朝講演会があった。非常に立派であった。

（舎では、三村、平、福重、石川氏が行った。）

乾パンの配給があった。一人、六円也

中津 生

七月四日（金）晴天

昨日に引き続き予科生諸君の生態は、その平生をかへりみるに涙ぐましきものあり。“思はず” あはれなるものよ。汝の名は……と言いたくなる。

夏に入ったらしいが、夜中は時々寒い。

七月五日（土）雨後曇

夕方振りに雨が降って、萬物皆すが しくなる。

予科の学期末及び医学部の試験全く終了し、舎すべての人がほっとする。小生、眼よりの神経衰弱にて、試験も受けられず、毎日々々通院にて、いささか消耗気味。夕刻より、第六、第九、第三とぶっ通しレコードを聴く。土曜の晩は至極快適である。

本日、米の配給あり、今井、福重（弟）が取りに行く

七月六日（日）晴後曇

昼頃まではガンツ好い天気であった。

予科生の試験がすんだせいもあらう、舎内は、皆外出らしくシーンと静まりかへっている。小生等、午後より中島へボートを漕ぎに行く。次第に空模様悪くなり、目的を達せずして歸る。いささか消耗す。夕方より、レコードをきく。 四号室

七月七日（月）

朝曇っていたが、ひる頃から良い天気となった。愈々酷暑に入るであらう。

いつも寄宿の自分の部屋の前で、草を食っている仔山羊が大分大きくなって、もう一匹で、親と離れて別につながれている。

七月八日（火）雨後曇

朝から雨降り。午前中、皆んなに負けずにレコードをきく。きゝ出すと次第に学校の時間をもぎとってまで、きゝ続けてしまふ。

今日の“花咲か爺さん”皆が集まらないので中止とする。何かかにやで十三日迄いそがしい。明日から晴れてくれよ。 六号室

七月九日（水）晴時々曇時々晴

早朝、五、六人の舎生が、高飛びなどしていた。高飛びの最高記録は、世木澤君一、四米、立幅は、一等泉田君、三段飛びの優勝者は同じく泉田君。

夜、北野君外泊する。望月さん来舎宿泊

七月十日（木）

朝、先輩望月さんを交へ会食す。後、次の如き副舎長竝、各掛りよりの話、相談あり

一、薪購入の件（冬期間）使用量、価格の点詳細ならず暫く見合はす。

二、記念祭準備、演劇は残念乍ら中止、舎内外の清掃を徹底する。（副舎長）

一、運動部三角君より、ピンポン、テニスにつき、球、ボール購入の件

一、作業部より、舎前ローン耕作、結球白菜を全面に蒔種、十二日まで耕作

七月十一日 曇後晴

早朝より宮部先生のお祝の準備のアルバイトあり。午後、飯田、河村君と病院のプールに泳ぎに行く。日は照りつけるが、あがってぞっとしていると、がた 震へる程寒かった。歸りがけに、五、六人女学生が来たが、我々は消耗していたのでそのまま引き上げた。熱望せる方は、恵迪寮のプールに行かるべし。

外に変わったことなし。 Q 生

七月十二日（土） 快晴

愈々宮部先生の御祝も翌日、皆、忙殺されて了っている。舎前のローンも略々その概要を現はし て来た。はて、出来た暁はと？

青空高く、白雲がかかり、暑くもあらず、夏の日快晴とは今日の事だらう。

T I 記

七月十三日（日） 快晴

朝から真夏を思はせる空、榆の木の葉かそけく揺れる夏の風、夏の常の天を、此の朝に見る。日中に至り、日曜日との事とて、人も薄模様の夏着に身をまかせ、日傘手取りて、木陰を歩むも窓外に見ゆ。窓外の眺望に心を引かれるのは、一瞬か。

午後三時迄は、手にヘラ持ち、籠持ち、鍋持ち、市街狭きものと、東奔西走、果は、日盛りの暑に、火ををこし、汗拭き の台所乱闘、その間に会場の準備もなり、舎外も今掃れた地上の幕の縞模様濃き影を映し夏風シェイクしている大樹、そうしたものにより以上に雅を具へている。

午後三時頃には、諸先輩もちらほら舎に見えられ、舎内往来に会顔す。慈父宮部先生が見えられ、先生八十八歳、米寿の祝賀会の幕は切り落された。

会の次第も進み、記念品贈呈、記念写真撮影等あり、祝賀の会は事なく閉づ。後、晩餐会が取り行はれ、香よき夏の寸志、又、味よし。箸一口とらへ数増せば、回顧の念に駆られてか、談笑の声もしきりとなる。

一瞬間くマグネシウム写真撮映に、一座驚異の顔でうなずきあい、嘆息を相かはす事三十分。夏の日盛りのむし暑き気配も、夕暮の涼しき風に吹かれ、先生、眼前のシクラメンの花房もなびく様。食姿つきる頃より、テーブルスピーチとやらでは、腰を上げになった青木先輩の長寿三箇条のお話しも事興ありと傾聴す。一同和気藹藹として、事もなかりけり。

一旦休憩の後、襟懐を開いて談話する会として、自由談話の宴が開催された。且、味を忘れた舎生に、胸も悪くなる様な汁粉がこの宴に用意され、まさに古諺何々処の魔が、

酒飲に用ふ大杯の如き器に、常人なれば、一杯如何とあやぶまれるに、我が腹にまだ五分の隙ありと、次の器を空ける勇者もあり、口が辺に食ひつけたあんこに笑ひ興ずるも、この宴のみか。汁粉に腹屹然として、諸先輩の御話も、宮部先生、吃驚の思出話となり、話し盛りて夏の夜は、木の間の闇闇と走り、八時頃、今日の宴は、「宮部先生萬歳」「寄宿舍萬歳」の叫声を、星の夜に残して閉ず。

七月十四日（月） 快晴

今日よりボツ 歸省する人も出て来て、本当に夏休みらしくなって来た。有意義な夏休みを送りたいと思ふ。

ローンも八月中には播種出来る由、野菜の収穫は無くなったが、早く実現出来て、早く美くなる事だらう。

昨日、宮部先生の召上がられた桜ん坊の種を今年卒業する北野、三村、石川さん達に、播いて記念に残してもらふ事にした。御気付の方は、皆、愛護して先生の米寿及び卒業諸兄の記念に、舎に残ませう。

上野 記

七月十五日（火） 晴

酷暑来襲!!

本日を以て舎は閉鎖。晚八時頃より解散コンパあり、薪の金を八月十日までに納めること、決算、現在在庫食糧の発表、夏休み歸らない人の食事に就いての相談等あり、終りに近ずいた時、進駐軍に驚かされ、全員各部屋に遁走せり。二、三の氏は、余り早く走った爲か、窓より飛び出すもなほその勢止らざりき。

世木澤さん歸省。現在、在舎人数、二十名

尚本日、インターハイあり、サッカーは、山形高校に破るゝも、硬式庭球は優勝せり。

明日、ラグビー、中川さん出場の由

坂井 記

七月十六日 晴後曇

今日は、猛烈な暑さだ。坂井も歸り、小生も今夜出発する。寄宿舍も次第に淋しくなつて来た。ラグビー大敗す。

午後、少し雨がボツ 降った。ザーと一雨降れば、涼しくなるし、又作物にも良いんだが。

中川 記

七月十七日

今日、福重（弟）君が歸省、追々、寄宿舍も小人数となつてきた。

昨日にまさる大暑。暖流を見にゆく。アイスクリーム屋が大繁昌である。

夕食は、トーキビ団子。しかし、副食は、イワシの天ぶらで、甚美味かった。

汗々々々々、朝から晩までに発散し流出する汗の量は何十立かになるさうだが、札幌中の人口の生ずる汗は、優に水道源くらいになりさうだ。

村上

七月十八日

うらめしくも暑き夏とはなりぬ。変わったことなし。

草地 記

七月十九日

斯う云ふ暑い時になると、却って昔汗みづくになってやった柔道なぞを思い出す。普段よりも今日のやうな日に却ってあの鹿爪らしい茶道なぞも奥床しく見えて来るものだ

(今井記)(河瀬記)

七月二十日

今井氏歸舎す。すると又歸るとの事也。今日は雨ありて、いささか生気を取り戻したり。

(今井記)(河瀬記)

七月二十一日(月) 雨

朝は曇り、午後雨となる。むし暑し。在留舎生、現在十五名、大分ひっそりして来た様な気がするが、二年前位は、全部でこの位だったのだが……。今井氏、本日狸小路にて、五目ならべにさっそうとして出場、見事金的を取る所を謙讓の美德を發揮して、金二十円也寄附に及んだとの事。氏のつゝましさに敬意を表す。大類先生、昨日抜歯、エッセン食へずとの事、気の毒千万。

(河瀬 記)

七月二十二日(火) 曇

今朝、大類氏歸省す。三村氏か石川氏(特に 三村氏)今迄の論文との取組みにも暫く一段落して二ヶ月振りで映画見学に行つて来た。

二、三日来の暑さにほっとする様な涼けさの訪れの日である。

中津 記

七月二十三日(水) 曇 雨

朝、飯田君歸省、中津君も釧路へ発つ。愈々舎も閑散になって来た。夜は、未だ十人も残っているとは思へない程静かである。

角田のおばさんが来舎されたお蔭で、晩飯が久し振りで飯になった。

七月二十四日(木)

寮内は、朝から静かである。朝からどんよりとした降りそうな空模様。楽な一日だった。今日は主食の配給日。米の配給があったとの事。久々に米の飯が続く。我々は少し米に憧れ過ぎているのかも知れない。

然し、舎生活の頭の切り変へは案外出来ても、舌の切り変へと言ふ奴は、仲々出来るものではなさそうだ。

世木沢

七月二十五日 曇、霧雨模様

朝、雨は晴れたが、一日降りた相な曇日であった。十時、例の如く病院へ行って治療、午後はずっと読書、生き苦しい思ひで「土」を読み了へた・

晩の十時頃、森田歸舎、河瀬さんは、明日歸省されるので、六号室へ引越し、今日は一日中誠に涼しくて、七月も末とは思へなかった。

(福重記)

七月二十六日

午前中曇、午後より降雨、この 涼気を感じずるが、間もなく再び夏の暑さが訪れる様で

ある。

大工が来て、十二号室、一号室の修復を始め、十二号室は完成、立派な洋室となった。

七月二十七日

昨日に続き、大工さんが改室をやっている。

午後は陽もてって、最高気温は、二十六度、どうやら夏の調子を取りもどしたらしい。汽車のひびき、せみの声、子供の声、風の音、すべてが夏休みのひびきをつたへている。

村上さん旭川に立つ

七月二十八日

大工、毎日来てセッセと働く。此頃、学校は静かで仲々良い。休み中がより気持よく勉強出来る大学という処に考えるべき点はある様に思ふ。之は大学の側の如く機構が悪いとのみ思ふのは、間違いであると思ふ。

そこには人間の ゴイスティクな、...悪い意味でもない...ある factor を考慮に入れなければならない。

七月二十九日

小生、実験のクギリをうまくつけて、午後より“戦争と平和”見に行く。或る意味で抜群。

涼しい一日、涼しければ涼しいで、又、作物が気に懸る。

七月三十日

中津兄歸省、久し振りらしい。

毎夕、世木澤、泉田兄は、テニスに熱中。

それに此頃は三村さんも加っている。秋に備へて体力養成中。今日も大分涼しい。夏だといって、さして暑くもなく、寧ろ“秋立つ”と思はせる様な此頃でも、駄目な物だ。

一旦頭に巢喰った夏休みといふ観念は、すっかり本から遠ざけてしまふ。

新しい部屋を奥田先生見に来らる。親の有難き哉。明朝はアルバイトの予定。

七月三十一日(土)

アルバイト、残念乍ら時ならぬ驟雨のため中止となる。上野氏、秋の収穫を見指して張切り居りしに。ひる迄晴れる。

舎コートでは、水溜りの中にて子供遊ぶ。

主食配給日。久し振りに麦粉四日分あたる。“カンちゃん”商用にて寄る。元気旺盛“カンちゃん”は、河村寛廣君。

夏型のむせる日も数日、つゆ期のやうな日、低温つゞき、七月も行く。夏休みの半ば過ぐ。

八月一日(金)

七月も暮れ、既に八月。 竿に陽は高く、舎生の苦心に青物が水々しく育っている。

朝早いのが上野氏、早朝より独り語る声は怠生に対する鞭撻か。小生の業、遅々として進まず。

今朝大根蒔等、畠のアルバイトありたり。

八月二日（土） 雨

“アルバイト”やろうとすると雨で、がっかりする。皆、一寸ホッとした顔付だ。

大根も白菜も芽を出した。この雨で、ぐっと伸びる事だろう。

休暇に怠慢病は付き物らしい。近頃は大分重態だ。小母さんが、頭が痛いとかいって唸っていた。きっと自分が怨んだからだらう。

胡瓜も大分役に立ってきた。 上野 記

八月三日（日）

そう暑くもないしのぎよい日であった。小生は、野心を抱いて計算に忙しい。計算につかれた目にしみ渡る木の緑は、又とないうれしい体験であったと思ふ、？

舎の仕事をおろそかにしてすまないと思っている。舎に特別変わったことなし。

草地 記

八月四日（月） 雨

憂うつな天気が続く。奥羽地方は、又々大洪水で、汽車の不通箇所続出す。今年の食糧が思ひやられる。

村上君、食糧を負って来る。御苦労多謝

夕食後、来舎中の旭中成田先生に、全舎生を挙げて卓球を挑戦し、枕を並べて惨敗す。尤も先生は、全国的の大選手とかや。

石川

八月五日（火）

朝から昨日に続くどんよりした空。早朝は雨。秋を思はせる様な冷い空気。午後は久し振りに暫らく陽が照った。雨上りの湿った地 のためか、ダス・キン共が寮に遊びにくる。

草地、村上、上野三氏、いづれも旭川へ歸還、ひよこ、一匹死亡。猫にでも取られたか行衛不明。中田、元気な顔にて夕刻歸省。

八月六日（水） うす曇り

今日も時々うす日がさす程度の曇日。それでも降らないだけ有難い。昨日で僕も病院通ひが終ったので、夕方振りに中田と学校、街へ出る。歸省せんものと。ところが、歸舎すると、お袋と妹が出札せられて、僕は歸省せずとも良いとの事。半年振りでお袋の顔を見るとやはり懐しい。百山の話で、夜の更けるのも知らず、四号室へ一泊す。

飯田兄も札幌へ用事があって来舎、泊る。

夏休みの舎も、少し賑やかであった。

八月七日（木） 雨後曇

朝から雨降りだ。八月の初旬、例年なれば盛夏と云ふ頃なのに、雨のせいでもあらうか、むしろ寒い感じだ。

畠の作物、雑草と背くらべ（但し表の畠）

上野さん歸る。作物其の物の様な顔をして居られた。七夕祭り、そゞろダス・キンの頃がしのばれる。

主食配給、麦一日分、とうきびの粉四日分、とうきび一日分

八月八日（金） 晴

雨後の風、清涼の感深し。蝉の鳴声も何か遠慮している様。和かに時が過ぎ行く。

味噌配給、八月分

八月九日 曇、雨

終日、曇り勝、夕方になり雨

最近の極東軍事裁判の新聞記事が特に目を引く。大分世間も落付いて来たので、こう云った問題も感情的にでなく眺められて来たと思ふ。今時の戦の客観的原因が十分に明確にされない限り、今度の裁判も何だかヴェールでおゝわれた様で、不明瞭に感ずる。とに角、まだ国民の大部分は、この秘密について無知である。

八月十日（日）

割合曇っていたわりにあつかった。もう八月十日。終戦当時の事を思ひうかべると、何だか二年経ったのであらうが、その二年が早いのか遅いのか、判断つきかねる程に頭は混乱し切っているといふより、ノビきっている。

が.....かくして私達は、卒業して行くので有る。

私は、ある科学者の言葉を覚えている。

“此頃は、中学校や高等学校の入学が、大分困難になってきたが、それでも一度入学さへすれば、とにかく無事にせり上って行くのが通例である。此れからみると昔の人は、不完全な寺子屋の階段を手を引いてもらってやっと上ると、それから先きは、自分で階段を刻んだり、蔓にすがって絶壁をよぢる様な思ひをしなければならなかつた。それで大概の人は、途中で思ひ切ってしまっただらうが、登りつめた人の腕や脚は、鉄の様に鍛へられたに違いない。と云った事さ。考へさせられる事である。此の処、あるテーマを本をよんでまとめる事も仲々難しい物だ。だが勉強にはなる物だ。

考へてみれば、もうあと一週間で予科の人達も歸ってくる事になる。日一日と卒業の時期が近づいて来る。全てを何かにまかせている自分の前途が一步一步光明に進んでいるのか、暗路に進んでいるのか、恐らく規準の出来ない将来の自分に目を向けると心もとない次第である。

“見合ひ結婚”の時にも恐らくこんな不安を感ずるであらうか?! ともかく、内心は、おぼつかない物である。之をさけるのが、本であり、実験であると思はれる様な気がする。考へてもどーにもならぬものだから。

卒業を漠然と考へていた此の言葉も愈々自分が直面すると、随分変てこな感情におそはれる物だ。

北野

をばさん芝居へ。夕食、世木澤、泉田の手で、うまかつた。

夜、十時、やっとまとめ上げた。頁 45

二週間に余るフントウ(?)今みる部屋の全てが、目新しく、目にしみる事、くらい外気が又となく清々しい。

八月十一日(月) 晴

早朝ヨリ小生、世木澤、石川ノ三氏、旭川ニ、エッセンヲショイニ行ク。猛然、大量セオツテ来タガ道中事無キヲ得テ、無事札幌着。旭川ニテ、平、世木澤両家ノ並々ナラヌオ世話ニアツカリ、少々、気分ガヒケタ

K・S

八月十六日

十五日より開舎の所、福重(弟)並に坂井両君歸札さる。愈々予科の授業も近づき、皆の顔が頻に待たれる。

T・I 記

八月十七日 晴

明日から又、授業なり。

O君、「明日からぞ少しは」と、一ヶ月の最後の断末魔のものがきか、読書。

両日に黒顔の光澤もよし、休み中のアルバイト大きに察せられます。と、他の一室から「ブリッジ bridge」「よおしストップ」なかの盛況、トランプさ。「今日限りの休み也。遊べとやら」

記者も予科生、「明日からぞ少しはね」と、夕方から机にむく。一向に頭にぶくてだめ。

まだのぞみはあるさ、のんきなやつも澤山だからな。未だ歸ってこないのも、なに

「遊べさ！」

刻々と明日へと、窓に虫声を送る夕風又冷し

八月十八日 晴

本日より予科始まる。一箇月の休の後再び前学期の悪成績を挽回すべく、颯爽?と登校するなり。一年二組 - 八組までは、教室なき爲住所不定なり。医専の教室まで借りるとか、一学期の成績、総点で六十点以下のみ発表、悲愴。

吉田君歸舎、大分皆の顔が揃った。

坂井 記

八月十九日(火) 晴

副舎長草地さん歸舎さる。

八月二十日(水) 曇

引揚船乗組船医として二十四日出帆される河瀬兄が帯広よりこられる。

本日夜は、話の泉にて、ラジオに集る面々があつた。テニス、ピンポンの音がにぎやかに聞える。

盆踊りもいよ 最後の日である。

九月、十月は、完配にすると、アメリカで発表してくれた。物価曲線が幾分でも安定してくれるとよいが

村上 記

八月二十一日(木) 晴

二学期になってからの医学部、全く重労働を課せられた様に、毎日 ぎっしりつまっ

て講義がある。一日ペンを走らせて歸ると、心身ともにくったりする。来週よりいよ解剖が始まるらしい。

舎も大半顔がそろったのに未だにくったりしていて、休みの延長と云った感じ、こゝらで一つ改革をやらねばと考える。

もう一ヶ月余り、舎の元老組が出られるが非常な大きな打撃だと思ふ。色々の意味において後の責任と云ふものが痛切に感ぜられる。

食前、テニスをやり、心持よく消耗した。

平 記

八月二十二日（金） 晴

朝、本吉君が久しぶりに元気で歸舎された。

これで、中川、三角、中津、明智、北野の諸氏を除いて全員そろったことになるのでここで一つ何かやりたいのですが、名案はありませんかね。

午後はむし暑くて、体が猛烈にだるかったが、夕方からは流石に涼しく凌ぎよい。大いに本でも読んでやりませうと思ふのですが、思ふ様には頭が働いてくれぬので困っております。よい薬があれば紹介して下さい。

夜、川瀬君、十時十五分で函館に向ふ。

草地 記

八月二十三日（土） 晴

朝、六時半よりアルバイト。久し振りに舎生揃って朝露を踏む。次で朝食を会食す。元吉君と新入舎生の紹介。 来年に延ばす件等々。

運動、テニス（飯、泉、石三、川、世、福、他）ピンポン（今、坂、中、大、三、石、福、他大ガイ）薪切り（今、福、大）薪割りコート改良（泉田他）選択（泉、石、大、平、大勢）入浴、音楽、オルガン、ヴァイオリン、ハーモニカ、蛮声、悲鳴、喚声、口笛、ラジオ、ピヨ、舎内外に活気満つ。夜食時、明日を期し海水浴を目論むグループあり

以上書終ってから、ふと、もう二度とこの日誌を書くことがないかも知れぬと思って妙な気がした。一つ名文を遺さふとも思ったが、何だか早まったことをする様な気がするから止める。

石川

八月二十四日（日） 快晴

有志七、八人が海へ行った。朝方曇り勝だったので大分あやふまれたが、決行。十時頃から快調に晴れた。仲々快適だった由、爲に寮内はカン散。終日、街の騒音のみが侵入して来る。

十七時、海浜行き歸還 世木澤

八月二十五日 曇後雨

朝、こほろぎやきりぎりすの合奏に、さながら秋を思はせる様な静な涼しい夜が明けた。今朝はまた昨日の晴天を思ひ出すべきもない曇天で、うすら寒い風さへも交へて居る。

ラヂオは、午後は雨と報じて居る。

昼、三、四時限休講で、マントと芥川をたずさへ、寛ちゃんと共に植物園へ読書に行く。天候のせいかな園内は閑静にして、何ものにもさまたげられず、「羅生門」から読み返す事が出来た。一時半頃歸舎す。

晩、夕方から雨になった。孤独をしみ　と感じさせる様な寂しい雨だ。今夜も又、トランプに更けて行った。

今日は来ているか、今日はかと毎日待ちながら今日も眼鏡屋の通知は来て居なかった。眼鏡のない事にかこつけての自分の毎日の怠慢、何ものにも煩はされる事なしに、充分読書の出来る人が、うらやましい。

今日もまた 満たざる思ひ 降る雨を

この身にうけてなくさめにけり

あがき居る 我が焦心を降る雨や

あきらめ心にかへてたまほし

隆幸

ともすれば、峻烈な、又、痛切な批判を受けがちな、此頃のだらしのない自分の生活を顧みると、何も云ふ事は出来ないのですが、現在、舎生活が沈滞して居る事は事実です。しかも、その一端が自分にある様な気がして……。

“ 人生の満足も不満足も、要するに對世間的なものであって、自己の内部に存在するものではない。人間は、世間や世評に絶えず心をわづらはされている。彼の眞の幸福と見えるものも、結局、相対的なものにすぎない。”

八月二十六日（火） 小雨後曇

二、三日前の様な暑い日も速や再来の望みなく、八月の下旬は、秋来たるの感を深める。今日も朝から小雨が降り続けている。舎内には変りなし。

八月二十七日（水） 曇時々晴

昨日の雨も大体あがった様で、だゞっ広い天空に、青空が処々垣間見える。日中には又、蝉の声がうるさく聞かれた。

夕食後、鋸の目立が出来てきたので、アルバイトをする。草地さん、森田、吉田、後から本吉さん、平さん、弟が加って、早い事、早い事。たちまちにして薪の山をきづく。秋空の様な青い、高い天の下、テニスの音も爽快に響いて居た。

七時から、文芸部楓林問題を主に会合が開かる。楓林は、原稿用紙を買って、全舎生こぞって立派なものを創る事になる。

又、本日の午前中に電燈会社から調べに来て、電球w数超過罰金、二百十六円也の話と、今後、各部屋電球は原則として、六〇wなら一ヶ、四〇wの場合は二ヶと決定、其の他、この日記の事、宮部先生米寿のお祝の時の写真の事、等々、八時閉会迄、有意義であった。夜は、全く涼しい。文字通り燈火親しむの候、舎内は本当に静かである。

昨夜から個性と云ふ事に就て考へて居る。

“個性を寛假し得ないことのうちには、卑怯な嫉妬心とはかない自信とが含まれている。変った個性が出て来る時に、これを何とかケチをつけなければ、自らの立場の動揺を感じず意気地なさがあり、変った個性の人が衆人の意表に現れる時に、これを見逃すことは、自分の地位も落ちる様に感ずる嫉妬心がある。本当に自分に独自の立場を持つ者は、不思議にも他人を自分の支配の下に置かうとしない。自己を顧みて、他人に尊敬の心がわき、他人によって動かされない自負心があるからである。異なるものに対するに寛容をもってし、然も自己を固くとして動かざるは、矛盾なるが如くして実は矛盾でない。それが本当なのだ。”

が然し、がしかし、お前の独自の立場と云ふものにまだ 矛盾はありはしないか？いやある。大いにある。!!

“ - 人は外出しない、 - それは悪いことだ。尤も人は外出し得ないのだ。しかもそれは外出しないからだ。 - 人はすでに自分が戸外にいると信じているので外出しないのだ。 - 人が若し自分が閉ぢ籠められていると知っていたら、すくなくとも外出したい欲望だけは持つことが出来たはずだ。 -

僕は、盲目だから観察しないし、又、し得ないのかも知れぬ。観察！そこに読書があり、義論がある。しかも何時も考へている。僕のみじめな盲目の生活！心だけは頼む、盲目になってくれるな！人間は二つの道...夢と現実...を共に歩けないものだらうか？

八月二十八日 晴天

鶏が今日も犬に追はれた由。 今朝は盗まれそうになった。あまり野放しにも出来ない。早く食てしまふ方が、良いかも知れないですね？米の配給 Fuku 君等がアルバイト。

八月二十九日 晴天

八月も余すところ三日となる。朝夕の涼しさは、ひとしおで、はや秋に入るを感ず。落葉もはげしい。論文を今月一杯と、気持だけは張切ったが、なか そうはいかず、実行はそれに平行しないのは残念なり。いささかさびしい気持なり。（本吉 記）

八月三十日（土） 曇一時晴れ及小雨

今日は又、めっきりすゞしい日だ。風林の原稿は、九月十日迄に出せといふ。晩は賀川豊彦のお話し会があるため、その道の信仰者諸君は出かけた。大類の君は、小生を百万人の音楽へ行かうと誘惑せしも、何せ十時半迄お許しの今日だ、存分妙音を奏でて皆をうっとりさせることにきめた。而し飽きて八時に止めて勉強。

八月三十一日（日）

小生、大腸カタルで終日 通ひ、今日でもう五日目、随分とスマートに成りました。夕方からは小母さんにユタンポを入れてもらってオネンネ。消耗しています。でも、熱が平熱ですから、悪性のものではないと思っています。 君、吉田君歸舎

九月一日

愈々九月です。此の月は私も卒業して行きます。舎生でなくなるのも此の月ですと一事 して今更驚くばかりです。卒業といふ事は色々考へられても、退舎、舎生でなくな

るなんて考へる事は、一寸出来ませんでした。丁度私のヒフが此の月の終りには或る日を限って私のものでなくなるのと同じ様なものですもの。身体は消耗しましたが終日登校、実験。卒業実験も無事完了しました。大体思ふ存分やれました。

考へてみれば、此の日誌にもよくしてもう一度かけるかどーか？随分と厄介に成ったものです。初めて北海道に渡った頃からズーと学生時代の全てを送ったんですから、淋しみも、苦しきも、楽しみも、みんな古びた寄宿舎の壁が吸ひ込んでいる様な気がします。舎でなくては得られないいくつかのものに与られました。何れ、こういふことは、又雑誌にでも書きません。

今井君、内地向け一週間の予定で出発。

世木澤君母堂、昨日来舎、お土産ものに、朝食にぎはふ

(北野)

九月二日 朝カラ晩迄、コレトイッテ変ツタ事モナイ。

只、モウ、風ノ音ニ驚カサレル季節ニナッテシマッタノヲ、今更ナガラ驚カサレルダケダ。

九月三日(水) 快晴

朝から澄み渡った日本晴の好天気。七、八月と北海道としては珍らしい天気つゞき、土用中の低温、土用迄の酷暑、実に変化に富んだ天候だった。又、昨二百十日のやゝ何か予感を与へるやうな騒風、そういうものを一蹴した如き今日であった。

朝より、村上兄、福重兄ら、麦粉大量背負ひ来る。薪切り相当に進捗し、残量三分の一、堆高く小屋軒前を飾っている。

九月四日(木) 快晴

朝から秋晴れの好天気。休みなら一寸ハイキングと言ふところ。

今日は語学四時間、屠所の羊の思ひで舎を出たが、神様のお陰ですか、幸に一回もあたりませなんだ。午後より予科にテニスの校内大会あり、我が舎も名誉ある選手を一人だした。十一号室の住人井君也。

三角、中川両君未だに歸舎せず。病気か？

事のなからんことを切に祈る次第。

夜になっても、もう蚊がでない。虫が盛んにすだいている。遠くから汽車の音、時計台の鐘の音、犬の鳴声、スリッパの音、e t c

T・O生

九月五日(金) 曇後暴風

窓下、緑の雑草、二尺有余の高さする。

軒端の雨滴に痛まし。冷雨風を持して、トタン屋根に乱音反撥す。上茎青つぶらなるトマト、不時の風に黄葉越しに一瓜のイメージあり。厚き雲海に部屋薄闇にして、單身秋衰を貪る。

.....蟻の如くあつまりて、東西にいそぎ、南北に走る。高きあり、卑しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり、夕にいねて、朝に起く。いとなむ所何事

ぞや。生を貪り、利を求めて、やむときなし。期するところ、ただ老と死とにあり。その来ること速かにして、愈々の間にとどまらず。これを待つ間、何の樂があらむ。惑へるものは之を恐れず名利に溺れて先途の近きことを顧みねばなり。愚かなる人はまた之をかなしむ。常住ならむと思ひて変化の理を知らねばなり。……

「此れを待つ間何の樂があらむ」「衆人無心に待ち、無心に楽しむ」

暗き廻廊にともる燈火にかすかなる炊烟に机上に飾る夕飯に、徒らに心身を温められ食後の団欒、一人箸の絶ゆにしたがひ賑々し。碁石の音を片隅に、ダンスの「シャッセ」「ボックス」等の用語、傍觀者の苦笑又爆笑に、一座騒然とし、箸を片手に碁石を片手に、第一行爲、第二行爲、我が心になしの様、その間一時間、もうぼつ 各自の部屋に歸る。雨の日の楽しきは、この様なり。

三角歸る。風と共に。赤色の頬に旅やつれた淡黒の顔、目、舎生、歡迎の辞も口籠り目驚く。“Hail to you, tell me you overreach your recess, funny guy! May be you don't know that, you'll?”

早速、南瓜の購入へと、湿ったアスハルトの道路を走る。雨止みむ。秋風強烈に頭髪をなで、乱舞す。空には瑞相、夜空の性が輝し、寝巻足もとをからんで、寒氣我が心を奪ふ。行き違う自動車のヘッドライトも溜水に映ゆ。買ふ事ならずして歸る。三角歡迎のコンパーも清き雨と共に流る。

九月六日(土) 雨天

六時十五分起床、アルバイトを行ふ。何時も乍ら寢太郎には痛手らしい。四十五分より会食。これから寒くなると云ふ理由のため、食事の際、着衣する様になった。その外別に記する事はない。近頃の舎生活には異変もなく、極めて健全な脈を打っている。

舎生の気分も爽快だ。味覚の秋、收穫の秋で嬉しくも又楽しい時候の勢かも知れない。

九月七日(日) 晴

秋晴の快哉な日曜日。朝早く中津さん歸られる。朝は非常に寒かった。朝から卓球の音絶間が無かった。一日秋のおだやかな日曜日が続いた外、別に変ったことは無かった。

(坂井 記)

九月八日(月) 雨 (村上 記)

雨がふりつゞいて、秋寒をしみ 感ずる

夕食は南瓜であった。夕刻、河瀬氏が引揚船船医勤務から引上げてこられた。望月氏のハイラーテンは二十日とのことである。

土別からの手紙二通が来ているのも式についての打合せでもあらうか。新卒の方々の論文もそろ 出来上がったらしい。

九月九日(火) 快晴 河村

実によい天気だ。昨晩は遅く上野さんが全快して歸舎された。楓林の原稿も締切を明日に、舎生一同頑張っている。夕食はうまい 「うどん」だった。大食漢は最高ドンブリに山盛三パイやつつけた。食後大分つらかったらしい。

九月十日（水） 快晴

早朝、中川が歸舎し、舎生全員の顔がこれで揃ふことになる。入れ変へに小母さんが角田へ四日程息抜きに出掛けた。喜び勇んで。

九月も、もう十日で、今年卒業の四人の送別会も十七日と決定をみた。すぐにたつて了ひ相な気がする。 平 記

九月十一日

まだし凋落の影こそ見へね。高く澄む空に秋の眺めの一しほ て、麦粉配給他変わったことなし。 草地 記

九月十二日（金）

別にかはったこともなく、卓球をやっておそくかへる。風邪をひいて少し消耗している。山岳部の花岡さんの遭難に対する批評会があった。

九月十三日（土）

静かな土曜の午後だった。夜卓球が行はれた。歸ってきてからすでに一週間を過ごす。すっかり秋だ。落ち着いて一番仕事の出来る時である。

九月十四日（日）

天候不順の爲、オイランブチ行は中止、朝飯を食ふと非常によい天気になった。皮肉三村、石川、世木澤、中川、大類、河村の諸氏と共に、ハイキングと出かける。天気は曇って来たりしたが大したことなし。目的地は発寒川。飯をたき、肉汁をすする。石をなげなどして、忽ち歸る時間となる。中川さんと共に、右峯の山をこえて歸る。大きな蟻の巣あり、ケルンをきづく間に、素はだには 消耗する。
(三日間三角記 謝怠慢)

九月十五日

一日中雨ふり。午後八時より舎歌の公選、結局、村上君の舎歌が採用される事となる(応募者は、明智、福重兄との三人)曲は改めて募集、来月十五日決める事となる。後、卒業生送別会について相談す。会費は一人五拾円づゝ出す事となる。

九月十六日（火）

朝から風雨強く各地に水害があった様である。河村君一寸歸省さる。昨日論文の審査も終り、どうやら卒業出来るらしい。もうこの日誌も書けないと思っていたら又廻って来た。夜、北野、三村、元吉君と宮部先生を訪ひ色々とお話をうかがって来る。

九月十七日 曇り

朝から大変涼しかった。茸がきよき 生え出した。小母さんが籠をもって出かけた寸前、よその人に採られ惜しがっていた。而、喰ったお汁は美味かった。

九月十八日（木） 曇り

河村君が歸って来た。

夜、六時より、九月卒業する三村、北野、石川、本吉の四兄の送別会を、宮部先生、奥田先生、平戸先生を迎へて盛大に行った。

会食を行った後、送別の時を、副舎長と河瀬、兄から述べ、後、四名の人々の答辞、後、先輩方の祝辞迄誠に結構な気分行はれて終わった。

後、卒業生を囲む夕として、雑談会を行ふ。この時も又何んとも云はれない程立派だった。終つて、ピンポン大会を学部と予科対抗で行ふ。平、三角氏快調な奮闘振りであった。皆んな眠り沈まったのは、一時頃であった。

記念品として、この四名に宮部先生の色紙をおくらす。「少年よ大志を抱け」と記したのを三枚、元吉氏は「禁酒禁煙」と書いたものであった。

九月十九日 曇時々晴れ

連日の雨曇りそして風の日もどうやら終つた様だ。今日は、晴れた空さい望まれ気持のよい一日であった。植物園へ昨日借りた鉢植を三個返して来た。

九月二十日

一日中快的な秋晴、正に天高く馬肥ゆるの秋。例によって土曜のアルバイト、たまの早起きは寝坊にとっては良薬であらう。平岡養一の木琴独奏が中央講堂にて行れた。

二、三の舎生有志が聞きに行ったが、果して彼等はどんな顔して歸つて来るだらうか？
切て明日は日曜、舎生諸兄よ、快的な日曜を過されん事を

九月二十一日

日曜日、朝からうららかな気分がただよっていた。予定通り八時より奥田先生の庭へリウの花を戴きに行く。早速舎の前に植えたけれど、先生曰く“記念に植えておきなさい”と。はて？何の記念やら。

酒井、三角両君、支笏湖行き（山越えによる）に沈没して歸つて来た。恐ろしく消耗したさうな。趣好とおは言へ御苦労な事。

“真の山好きかな”と思はしめる。

夜は平穩。有志が合唱の練習をやっている。

世木澤

九月二十二日（月） 雨時々曇、風強

一日中、秋雨が冷い風に交つて降ったり止んだり。全く冬の近きを感じさせる。冬！確かに寒い響を持っている。ラヂオや新聞は、関東地方のものすごかった惨状を報じている。彌光尊でなくとも天の試練を感じざるを得ない。国民の祖国に対する関心 Interesse は全く薄い様だ。小にしては、我々の舎生活に対する Interesse も。四人の方々が卒業されて退舎される日も追つて来た。自分には色々の事が想ひ浮んで来る。が、ゞ。“後の事は心配なく”と叫んでお別れ出来そうである。が、ゞ、それも自分が限りなく努力する限りに於て。

自己の孤独、故に読書と静思、時は將に秋、独り自己と自己とが対峙し、自己を諦視す

る生活、一切の問題は、自己から出発し、又自己に歸って来る。人の心を惹くものでその自己の如きものはないだらう。人はその自己から逃れ去るわけには行かぬ。“自己”の解決をいゝ加減にして置いたのではどんな問題も徹底的には解決出来ない。知恵も愛も闘ひも、すべては結局自己如何の問題である。

真に社会への Interesse が起り、舎への Interesse が本物のものとなり、益々強くなるのは、何等かの意味で、自己が解決されてからである。

静かに、立止れ、そして素直に卒直に自己を顧みよ！そこが総ての出発点なのだ！あゝ秋！
(隆幸)

九月二十三日 降雨後曇天

朝から激しく降雨、数日前の大洪水のあととて憂慮される。十時頃、雨は上ったが、依然曇天でうっ陶しい。

吉田君援農に出発した。上野君蘭島より歸舎

九月二十四日 晴後雨

大洪水の悲惨なる写真を新聞紙上でみるにつけ、読むにつけ、昨年は南海の大地震、今また台風、なんとなさけない事だらう。

国民は、幸福の上にも幸福を望んでいるにもかゝらず、どうしてかゝる不幸なめにあわねばならないのだらうか。

蒔かぬ種子は生えぬの格言の如く、どこかに何らかの原因があり、それを一日も速く目覚めるべきだと考えられる。あゝ偉大なる自然の力よ!!

明日、晴の卒業式をひかえ、四先輩の心境や如何

九月二十五日 雨後晴

十時より本年度の卒業式中央講堂に於て挙行政。何年振りに国家「君が代」を奉唱す。熱血五体にほとばしるを感ず。国敗れて山河ありとか、今卒業式にのぞみて唯涙とゞめなく流る。かならず我等の力によりて平和日本、神の国の実現に一さいを祖国に捧げん。この決意、永遠に続かん事を神に祈る。

今日の記載が四年半の思出深き楽しかった舎生活の最後となると思えば、四恩の御陰により卒業させて戴いた感謝と同時に、反面、この舎を去らねばならぬを思うとき、寂しき、やるせなき念にうたれ、自分の何も出来なかつた事を慚愧する時、ひとしお、残された舎生が、平和に楽しく、正しき強き舎生活を送られん事を心より祈り、且、期待するものである。今後の苦難の日本のために、学生としての使命に邁進されん事を、そして今後とも変らざる御指導と御鞭撻を願うものである。 (本吉記)

九月十六日 晴時々雨

七時より舎生大会あり。各人の率直な意見が述べられ、今後の社生活のよりよい出発を希望し、努力しようとする気持ちが表はれ有意義であつた。更に、庶務、生活、運動、文芸、アルバイトの各部を定め、各々各部の部長や係長となり、全員が責任ある地位について、生活の充実、円滑を来す試みとした。その精神は、組織による統一より個人々々

のしっかりした行動を基底とした組織力でなければならぬといふ意見である。尚、奥田先生教授就任祝を計画。河瀬さんが式の大將と決定、会費五十円
その他部屋替へ等をきめ、今月中に終了する事とした。オルガン演奏時間朝八時～九時、
昼十二時～一時半、夕食後～六時迄とし、勉学者の迷惑とならぬ様期した。

飯田

九月二十七日 晴時々雨

昨日ノ部屋割ニヨリ本日ヨリ部屋カへ、既ニ数室ノ移動ヲ終ル。
三角、ヘルベチヤニ行ク。

九月二十八日(日) 晴 60°F

朝焼を西の窓に見つ、拍子木の音に起床。

小生等が所は、昨日以来から新室に出入し我が爺泉田兄とも昨夜共に寝ね、即ち初寝の夢を見て以来三十四時間、魔よけの香を焚き、溺愛の様なりといふ所(こと面白く寒霜夜の此頃、彼爺、マウントシックと症不時あらはれてか、今宵シラフに寝ねけりとぞ) 偕て、不調和な歌声と机、椅子の運搬の噪音とで、舎、雑として、一向に自適せられる。恣して日暮れた。

九月二十九日(月) 晴

今晚は十五夜、昔、月見の宴で狸が腹鼓みをうって我が夜の秋を欧化したそうだが、舎生の中にも満腹に堪えかねて、腹鼓みを打って居る人も無きにしも非ずだらう。

明智

九月三十日(火)

伝統の高商戦が応援団のいざござから御流れになるのは残念な事だ。両校各々名誉の爲にと思つて意地を張るのかも知れぬが、少し狭量な気がする。も少し寛容な態度で相手を受入れても決して学校の名譽を毀ふものでもあるまい。實力は戦へばわかる事だ。残念で一寸と舎外の事に筆が走つたが選手の一員として、他の猛練をやつた選手の心中を察すると、一寸と憤慨したくなる。

今日は、本吉さんが愈々歸へられた。皆で長い寄書を書いて差上げた。何よりの寄宿舍生活の記念として、良い思い附の贈物だと思ふ。

寄宿舍から畏敬して居た非常に特徴ある方々が姿を消して行かれる事は、本当に淋しい気がする。後継者の責任は益々重くなつて行く。

何時終るかと思つたこの日記も遂に終となつた。

光陰矢のごとし!!

上野 記

昭和22年後半

十月一日(水)。十月となってしまう。今日から小生は四年目となりました。今年もあと三月ターテンドラングに悩まされる此頃である。寄宿舎に於ける生活はもっとよく検討されエライレエンシーのよいものにしたいものである。そしてイージーからしか得られない盲目的な粉飾的な生活はやめて男らしい或程の強引さを伴った、若々しい生活としたいものである。全般との関連とくに社会的な関係に於ける自己を見失いがちで、民主主義とは口にしながら、ややもすれば小さなグループを作りそのグループのエゴに走り盲目的に食って生きている世相である。国民の一人一人が同意するだけの時間と労力とその半分でもよいから社会の合理化のために提供するならば・・・と溜息をつくばかり。全般との関連の下に現実を把握して少し位いまづいもの会ったって合理的な自分自身に納得のゆく生活をしたいものである。デューイ所謂プラグマティズムに考えさせられる此頃である。河瀬君行方不明昨日帰らず。(草地)

十月二日(木)。昨日と同じ降ったり照ったりはっきりせぬ天気である。午前七時半より会合、燃料係より電熱器管理法案提出、可決された。皆の役割が定まってから寄宿舎全体が非常に活気づいて来た様な気がする。益々其の効果をを挙げられんことを(坂井)

十月三日(金)。相変わらずの天気。村上、平、吉田、坂井、四名帰省さる。他に変わったことなし。だんだん寒さが身に沁む頃となってきた。煙突の副木もそろそろつけねばならぬ。(大類)

十月四日(土)。朝から雨もようの日夕暮より本格的になる。今回は倶楽部初試みであるして 久々の司会が五号室で行われた。我が舎のケンイ、村上・河瀬両兄の不在は残念であったが、六名愛好者が集って一合せ終わったら河瀬兄が帰って来られた後、新米、落葉、馬肥ゆる、トンボ肌寒を主題として即席に句を合せた。仲々優秀なのがあって一同面白く、又批評吟味して深更二十三時に及ぶ、大部腹がへった。つれづれに駄句をこらすや秋の夜中

十月五日(日)快晴。朝から好い天気 山へ行く人達あり、全く歩きたくなるような日だ。朝薪のアルバイトをやる、實に快適な気分、それより へ卓球をしに行く永い間待たされるので体がちぢかんでしまう。夜には村上さん河村君帰られ又々コンパ服を着たままねてしまっていた。ものさびしこのごろ我は何をなせるのか夜目がさめてものおもいにふける。もうすぐ僕もホームシックがわかるかもしれません。(三角 亨)

十月六日(月)晴。今日はよい天気。日増しに寒さが増すように感じられる此頃。意志昂進をつくづく身内に感ずる。健康崇拜を捨てて、一切を大いなるものの御手に委ね、「勉強、勉強、勉強」今度卒業された北野兄も言われる通り「勉強の裏付のない理想は空想に終るであろう。」と思う。「真の諦念とは次の意味に外ならぬ。すなわち自己が外界の事象に支配されているのを感じつつ、しかも外的条件によって定められた宿命が内面的に自由独立たるべく、精進することである。」とシュワイツェルは言う。我等この精進にひたむきになりうるや否やはやがて「他の運命を己の中に体験し、能るかぎりの助力を与へ、しか

も己が働いたために他の生命が促され救われれば、それを至福と感ずる。」ことが出来るようになり、世界人生を倫理的に肯定し「生命を畏敬」することが如何なることであるかを知るに至る道程に立つか否かになることを感ずるのである。(村上)

十月七日(火)快晴。全く快適な秋晴であった。対高商秋期戦 小樽の地に於て行はる。自分も行きたかったが、言訳はよそう。とに角僕は怠慢である。気をまぎらわすため弁当持って八時過ぎから燈火のともるまで図書館へ籠った。家の中にいるのが勿体ない様な一日であったのだが。九時過ぎに遠征軍帰る。野球、庭球、卓球に敗れたりといえど、我が中川のラグビーを始め、よく大勝して帰る。予科万歳！！

十二時ともなれば流石涼しい。今日は何だか霜が降りそうだ。若き予科生諸君よ、各自各自なりに最前を盡して頑張り給へ。

燈火の陰に想ふや糸トンボ みつを
庭の榆、植物園の樹々、そろそろ色づいてきた。時は少しも待つてはくれない。刻々に過ぎていく。” 学問の意義 ” 考えたことありますか。” 人間と天との縦のつながり ” 気づかれたことありますか。誠に燈火親しむべきの候、然秋は沈思思索の時です。試験の為のゴマカシの勉強は役にたちませんぞ。

十月八日(水)晴、風。近頃寄宿舎の中に多くの風邪を引いている人を見る。晴れたりと云へども秋は深い寒気は容赦なくその時を告げない。聞けば試験の期日も近づきたる由。その かわ知らん何れにせよ各諸兄の御健康に留意あらん事を一重に祈る。

本多は五時半あり。奥田舎長の新外科教授の就任祝賀会があった。その委員長河瀬氏、配セン係中津氏外、会長係諸兄準備万端出来て、定刻より始まる。来客としては宮部先生一人、舎のお祖父様に当る宮部先生と父様に当る奥田先生を迎えてのお祝の夕べであるとの巻頭を飾る副舎長草地氏の言より会は進行する。舎長実に決的な御馳走が沢山並ぶこと誠に現下の状勢をあざむく感あり、益してやこの舎に於てをや。続いて川村氏の達弁の祝辞にありて万場和気湧く。時に於て実にこの舎に於いて見られるべき親しき暖かさを余輩は感ずるものであった。終わりに中津氏の祝辞、村上氏の祝辞で終りぬ。時於いて益々盛会の気溢る奥田先生のお話しに及んで最高なり。適々その奥田先生舎生たらむ頃の想い出に及ぶ、転現舎生諸兄の胸襟ほころびる和々やさかを今に感じて新たなる盛会さを想ふものである。終って宮部先生のお話し在り、我祖父の言又重くしてその意義我等が胸を張るものあり。九時会合を終る。

後、舎生の冬季突破大会開かる。これに当り副舎長議長に当り各部の意見を述べ。議論交々たり。而れども、二、三の結論を得るに当り閉ず。ここに於いても舎生経済の逼迫を切に感ずるものである。余は又明朝より七名の同志をもって六時半より体操を致す運びになたことを喜ぶ。以上中津記

十月九日(木)昨日までの秋晴れも今日は崩れて朝から少し雲が多く、午後曇りとなる。薯の配給衣料切符は受取る。電力使用超過料金払う。舎生の中等生補習論食堂で盛ん。住人

十月十日（金）雨天。昨夜よりの雨である。帰宅した石川氏より初めての手紙ある。各個人の頁を設けそれぞれの挨拶お礼などあるも、石川氏らしく面白い。夜に入って、適々消灯などす。」試験真近い予科生の騒ぎ悲ソウな顔せるも又一興。今頃の勤勉振りがあり難い。而し秋も深まり、風が梢えの枝葉をさそう時ともなれば必然時処その気も湧く。」どうも人と云うものは我が々な自然デクノ呆に過ぎない様な所もあるらしい」

「雨天に付今日のラジオ体操の 休んだ様だ」 五年生

十月十一日（土）曇。一日中曇天、昨日より福重氏の父君来て居られる。土曜日の事とて各部屋にてエッセン作り盛んらしい。河瀬記

十月十二日（日）曇。キャベツの配給あり、北野康氏懐しの故郷に向って午後八時の急行で出発せり。舎生一向プラットホーム迄見送りせり。予科生、一週間前に待望の試験をむかへてねじり鉢巻しかみつら。はるばる津軽の海を越えて三本木より中津氏の親戚及び知人五名北海道を視察に来る。河村の母来る。河村記

十月十三日（月）雨天。主食代替南瓜大量来る。舎内一般に静寂なり、予科試験週日を出でず午後より曇り雨降り来る。森田

十月十四日（火）曇。毎日変転極りない天候である。テニスも出来ない。しかし読書には好適かもしれぬ。今日から日活で指定席によるバアグマンのガス燈が始まる。近頃はあまり映画には行かない人が多い。石川 さんに宮部先生の記念式に写した写真を送る。小生は明日帰省予定。飯田

十月十六日（木）曇りがちの天気。明日から三日間休みが続くので平さん、飯田帰省、但し予科生の積もる思いの試験がある故か誰も帰らぬ。蓄音機修理成る。

十月十七日（金）晴れ。神嘗祭休日、秋晴れに試験を犯して山へ行く者、薪を伐る者、落ちていて試験勉強する予科生もない。蓋しかかる秋日和に試験やる方が間違っているの有ろうか。干し芋一日分 魚配給となる。T・T記

十月十八日（土）晴。休みという特別の安楽感からくるものか、勉学に少しも能率が上がらない。然し試験を控えて焦っていることは確かだ。

十月十九日（日）晴。明日から予科生の試験が始まることになる、二日間の休暇もすこしも役に立ったようには思われない。然し英気を幾分か養うことは出来たろう。

十月二十日（月）晴。第一日は終了した。試験は力を入れた学科が出来なかったり、至って朝漬けが存外出来たように思われる奇現象があるものだ。前者の場合実に意に満たない後口の悪い感じがする。後者の場合功利的立場からして幾らかでも消耗しなかったことに対して祝福したい気になる。そうして自分の才能に満足し又次回適用できるかに思う。明日これを繰り返す人がいるかもしれない。自分もその一人だ。然しその結果は明日にならなければわからない。I・Y生

十月二十一日（火）予科生諸君相変わらず試験。常に試験のごとく失敗談に花が咲かないところを見ると、成績上上と言うところであつたろう。異常なし。世木澤さん見学旅行より帰る。

十月二十二日（水）曇。小生は予科生である。この喜び歓声はなんぞ。剣峰アルパインに対してナポレオンは言う「豈我を妨げるアルプスあらんや」と彼の征服欲は斯く語った。

小生は左にあらず。この与えられた試験をまずまずようやく、今日迄の三日膨れ張れぼったい目つきでも頑張ったことを喜んでいるのである。人間には楽しみや喜びは必要であるというよりは、なくては人生なんか無味乾燥で嫌気のさすものらしい。この点で嫌世自殺家も世々、絶えないようである。試験前の苦痛は楽しむ即人生の意義を我々は把握させるのである。人生は斯く楽しみ大きいものである。苦は楽の種ならむ。

十月二十三日（木）晩雨。今日は、我が輩、予科生、諸兄の休養の日である。フリーな日、今日を如何に暮らそうと考えてみた。けれども前日に相応する天候外はダメ。舎内はもうとても耐えられぬ。7畳に三日の籠城で気もくさくさして居るんだと言って、この心を晴らしてくれるものは物一つ、人一人 舎にはおらん。

嗚呼陰気これも人生の楽しみを作る階段の一進行過程なんだと思えば、陰気に絶対的価値を見いだしたような気がして、暮であれば思案工夫もあるべきが、死ぬる道には手一つもなしと暖かき褥の夢となりぬ。本日大類、中田諸兄帰省す。

十月二十四日（金）雨。一日雨 秋の雨は人の心を腐らせるもの。憂鬱がらせるもの。アカシヤの街路樹に降り注いで春雨とはおよそ縁遠く。さて予科生諸君も試験が終わり余剰ファイとのやり場に困っているような。せめて記念祭までその盛んなるファイトを持ち続けて貰いたいものである。

十月二十五日（土）。大類アルバイト部長不在にて朝のアルバイト休むことにする。近く記念祭又この問題会合しなければならぬので 朝の会合は臨時にやめることにした。このことに対して不満の方もあったようですが、この不満は後日の会合にてお聞きします。中津君具合悪く寝ています。

十月二十六日（日）。早朝より大根抜き、水洗いなどのアルバイトご苦労様でした。予想外の収穫であった。福重弟、河村両君、舎の米取りに帰省、夜帰舎、後丁度一週間で第四十九回記念祭である。本格的準備に入らなければならない。今日より記念祭余練習のため歌劇などの雑音発生は午後十時までとする。草池記

十月二十七日（月）曇。朝からなんだか雪でも降ってきそうな天気。各グループで漸く劇合唱の練習が本格化してきた。他に変わったことなし。

十月二十八日（火）曇。本日七時より定期舎生大会を開く。記念祭のこと明智が色々と企画発表し、続いて谷部の報告有り。舎生活の具体的方面の論議が行われる。

- 1、庶務部 寄付電灯の件、月次会
- 2、生活部 食料中間報告、石炭、ストーブの件、会計
- 3、文芸部 図書購入の件、蓄音機修理の件
- 4、アルバイト部 来年度対策 便所くみ取り。ストーブ取り付け、配給

色々行われたが、本日は概して活発なる討論行われず、意気沈滞の感あった。記念祭も同様な気分支配されなければよいと思う。今月は色々なことで出費がかさみアルバイ

トへ行く人が増えてきた。今日なども5～6人ほいってきた様子。平記

十月二十九日(水)曇。朝方雨が雪に変わった。本格的な冬を思わせるような寒さである。排雪をして降る雪について登校、寒さの故の欠席者が多い。味噌・醤油・ビール、塩の配給有り。街路の手稲おろしの寒風が身にしみるようだ。台所ストーブを囲んで駄べる者多し。大類 記

十月三十日(木)晴後曇。米粉分配に、泥炭1トン寮連合より配給ある。物置より石炭の山崩してきた。記念祭近く。

十月三十一日 記念祭も近い、明智委員長以下各係は準備に余念がない。夜榊原兄来て泊まる。

十一月一日 医学部は 三日続けて休各学部科とも二日間の休みが有る。

十一月二日 実は小生、机上に日記載せておき、舎史資料にとってある。日誌とごちゃにして丁度一週間分(10.30～11.7)ためた次第。誠にお詫びのしようもないことと思っています。

十一月三日(月)第四十九回記念祭。朝八時頃より三先生の写真を拭き、食堂を煤払いし、第十二号室に新しいストーブを取り付け、舎の内外は全く清められた。それからデコレーションが始まる。赤と緑と黄のモールが飾り付けられ、植物園からお借りした松の盆栽がテーブルクロスの上に置かれる。食事係の方は卵割りに、牛乳買い、ETCに忙しい。

正四時、宮部先生、逢坂、青木、北村、亀井、奥田、若松、望月の各先輩の方々を迎えて、祭りの宵は始まる。舎生より三角兄先が立って、寄宿舍の齢をたたえられ、最後に河瀬兄、舎の生い立ちについてか語たらる。先輩の方より、新婚の望月氏、笑いつつ祝意を表せられ、逢坂先生は舎と信仰的背景、成立の事情などについて熱心に宮部先生に質問され、奥田舎長の訓辞あり、最後に宮部先生のお話があった。

勿論このときはエッセンは完了していたのは勿論のことである。即ちシチュー、オムレツ、茶巾絞り、ミルク、リンゴ、パンETCの久しぶりの満腹感であった。乏しき資金の中で苦勞せし係に感謝する。その後舎生の側から生活報告があつて、会を終了す。

余興が始まる。演劇は四つ、即興もの、数多く、歓呼の中に行わる。中でも面白かりしは、中川君の片山首相、河瀬君の「クジラッコトリ」明智君のダンスなどである。

1、金色夜叉(新作) 飯田、河村、村上

1 三つの寶(芥川原作) 世木澤、泉田、福重弟、今井、田

1 処女の死(倉田原作) 河瀬、坂井、平、中田

1、梨の花(久米原作) 福重、中津、三角、村上

以上の演劇は仲仲立派に行われた。最後に抽選の結果一等賞はついに梨の花に落ちたのである。よって多くの賞品が口に入ったのであった。

本日の委員左のごとし。係長は明智兄なりき

式場係 中川，福重兄，三角，河瀬，村上，
清掃係 上野，吉田，飯田，森田，
食事係 中田，今井，河瀬，福童弟，平，坂井，世木澤，大類，
接待係 草地，平
演芸係 福重弟，泉田，世木澤

十一月四日（火）本日朝二時頃になって寝たので一日眠い，勉強本日より大いに始めるつもり成れど，つい時間

十一月五日（水）記念祭終了後ストーブをたき始める。火は心配，山は紅葉は既に終わり，冬に入る寒あり。

十一月六日（木）日射冬木立を通して休講の二時間を山岳部の部屋等で過ごす快適。このごろ又ピンポンが行われる。テニスは季節を過ぎ，これからはスキー，スケートそれまでの間は又びちゃびちゃするだろう。

十一月七日（金）委員再選挙有り 一組集まって唾をかぶり話した。役員になるのは随分の大仕事だ軽々となれない。こんな選挙にも派閥的な考え等が入って来ないように理屈に工夫してやりたいものだ。

十一月八日（土）晴後曇。久しぶりで日記が回ってきた，さすが十一月ともなると朝夕は勿論学校に出てもだいぶん涼しくなった。朝週例のアルバイト6時半よりあり，屋外に積んであった薪を物置に入れる。七時より会食有り。来る十五日の月次会の話ありて，弁士決定。各学年より一名づつ今回は中田，福重（弟）中川，泉田，世木澤，村上の六氏，そのほか各部より色々話，注意等有り。土曜のこととて，午後は台所のストーブの回りにうづくまる人多し。平，世木沢，坂井，河村，森田，の五氏，帰省さる。で夕食後も静かであった。

十一月九日（日）晴時々曇。静かな安息日であった。毎夜毎夜の豊平川堤防殺人事件が朝夕の新聞を賑わしている。アメゾルらしいが，全く不愉快なことである。僕は九時から法文学部設立資金の不足調達の為出かける。昨春500万円の寄付を予定して設立された，法文が六万円しか現在集まらなくてつぶれそうだとは，はやとんだことである。平，河村二氏，夕刻無事帰舎，車両の取り締まりやかましいとか。